
魔王アテネの逆襲～勇者をぶっ倒せ!?!～

天王州 アテネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王アテネの逆襲〜勇者をぶっ倒せ!〜

【Nコード】

N8652K

【作者名】

天王州 アテネ

【あらすじ】

突如と異世界に召喚された主人公・天王州 アテネ。彼女はレコングスタというその世界で魔王を名乗って勇者の子孫に復讐を宣言。現実世界とゲーム世界が交錯する科学対魔法の異世界バトルファンタジー。果たして彼女は勇者の血筋を絶つことが出来るのか？ それとも別の道に行くのか？

1・召喚魔王（前書き）

皆さん、初めまして。私は白皇学院の理事長を勤める天王州 アテネと申します。ここでは私が体験した異世界冒険記を紹介致します。先日、私はハヤテと共にレコンギスタという世界へ行ってきました。そこで私は魔王になってしまったのです。何だかドキドキダンジョン（モバゲー・ラブこい真央より）みたいな感じで凄く楽しかったですわ。

それにしてもハヤテのヘタレっぷりには笑わさせてもらいましたわ。という訳で本編の方をお楽しみ下さい。

1・召喚魔王

杉並の地の殆どを占める私立白皇学院。私^{わたくし}、天王州 アテネはこの理事長である。

「アーたん、何か手伝うことある?」

短い水色髪の女の子のような顔をした少年が学院の校舎にある私の部屋に入ってきた。

彼の名は綾崎 ハヤテ。私の白馬の王子様だ。

「いや、特にありませんけど。ていうか貴方はどうしてノックもせずに入ってくるんですの?」

「だってノックしたらアーたんと一緒に時間が減るんだもん」

「まあ! ハヤテったら……」

ハヤテがこちらへ近付いてくる。

「ねえ、アーたん」

「何?」

「暇なら少し歩こう?」

「いいですわね」

私はハヤテと共に校舎から出て特に目的もなくその辺を彷徨く。

「ねえ、ハヤテ」

「何?」

「私の家で暮らしません?」

「でも僕はお嬢様に借金を返さなきゃいけないから」

「それなら私が差し上げますけど?」

「でもそれじゃアーたんの財産が」

「一億五千万なんて痛くも痒くもありませんわ。貴方は私の財産を好きだけ使って構わないのですよ」

「じゃあ返済してくれる?」

「いいですわ」

私は携帯電話を取り出した。

「銀行の口座はお持ち?」

「持ってるよ」

「店名と番号を教えてください。今から借金の額を送金しますわ」

ハヤテは携帯のディスプレイに表示した銀行口座を見せてくれた。私はインターネットを経由して彼の口座に一億五千六百八十万四千円を振り込んだ。

「確認して下さいます?」

「うん」

ハヤテが携帯で自分の口座を確かめる。

「有り難うアーたん!」

「どう致しまして。足りなかったら追加するので言って下さいね」

「足りるよ」

「それならよかった」

キンコンカンコンとチャイムが鳴る。

「あ、休み時間終わりだ。じゃあまた後で」

ハヤテは急いで校舎へ戻っていった。

「うん?」

校庭の木の上に頭に金の髪留めをつけた桃色長髪の端正な顔立ちをした少女がジッと立っているのが見えた。

あれは確かハヤテのクラスの桂さん?

私は彼女の下へ行くと声をかけた。

「そんなところで何をなさってるのですか? もうチャイムが鳴りましたわよ」

「降りられないのよ」

「受け止めてあげるから飛び降りなさい」

「分かったわ」

私が身構えると、桂さんが飛び降りた。

「えっ!?!」

桂さんが私の顔を片足で踏みつけて飛び降りる。

「受け止めるって言ったわよね？」

「確かに言いましたわ。！でも顔めがけて飛び降りられたら誰であるうと無理ですわ！」

「ハヤテくんだったら受け止められるわ」

「それってつまり私がハヤテより下ってこと！？　そういうことなのね！？」

「悔しかったら明日の執事大会に参加してハヤテくんをボコボコに負かしたら？」

「執事大会？」

「葛葉理事長が去年から思い付きで始めた白皇の行事よ」

あの野郎また勝手なことを > i 4 5 1 5 — 6 7 1 <

「いいですわ。私が勝ったら私にかしずいてもらいますわ」

「うっ……！」

嫌だと言いたげな表情を作る桂さん。

「不服かしら？」

「随分と自信たっぷりね」

「私はハヤテと喧嘩で負けたことがないのよ」

「へえ。ハヤテくんとはよく喧嘩するの？」

「意見が食い違えば」

「そうなんだ。でも彼を甘く見ない方がいいわよ。本気の彼は滅茶苦茶強いから」

「それはそうでしょうね。彼を鍛え上げたのは私ですから」

「師弟対決か。面白いのが見れそうだわ」

「じゃあね　そう言っって背中を向けて校舎へ歩いていく桂さん。
「待って」

私は桂さんを引き止めた。彼女は振り返った。

「何？」

「あの……明日の大会のことなんですけど、貴方の名前を貸して下さるかしら。執事になる訳だから、主の名前は必要じゃなくて？」

「いいわよ。話はそれだけ？」

「あと絶対に有り得ないことですけど、もし私が負けたら？」

「そうね……。考えとくわ」

そう言って桂さんは去っていった。

明日の執事大会は絶対に負けられない。私は必ず優勝してみせると心に誓った。

「あ、そうだわ！」

私は部屋へ戻ると帰り支度をして退校し、不動産に立ち寄った。

「この辺で3LDKの一軒家はありますか？」

「ちよつと待つて下さい」

従業員が物件案内を取り出す。

「こちらなんていかがです？」

従業員が指し示したのは、杉並の住宅街に建つ一軒家。学校も近いところにあり、登校に苦勞することもない。ただ一つ気になるのは

「あの、どうして一円なんです？」

「お聞きにならない方がよろしいですよ」

「聞かせて下さい」

「そうですね。実はですね、出るんですよ」

「出るって何が？」

「魔界に巣くう魔物が」

「そんな非科学的なことある筈がありませんわ。これ買います」

私はその曰く付きの家を購入すると、自宅に帰ってハヤテを呼び出し荷物をそこに運んだ。

「そう言えば振り込んだお金はどうなさいました？」

「ちゃんとお嬢様に渡したよ。それにしても何だか寒いね。夏だとい

うのになんだらう？」

確かに彼の言う通り寒気を感じていた。

「不動産は魔物が出るって仰ってましたわ」

「何でそんなの買ったの!？」

「安くて学校も近かったから」

ハヤテはとても怖がっていた。

「だ、大丈夫ですわ！ そんな非科学的なこと起こる筈がありませんから！ それにもし出たら私が倒してあげますわ！」

その時、漆黒の光が現れ私たちを飲み込み、別世界へと誘った。
「へ？」

やってきたのはどこかの倉庫。目の前にはドラクエに出て来るような青いスライムが一匹とランタンを手にした黒い革の服を着た黒い翼に細長い黒の尻尾を生やした桂さんによく似た少女が一人。

「スライム、成功したわ」

「ピキ？」

「あの、一体全体何がどうなってますの？」
すると目の前の悪魔娘がひざまずいた。

「お久しぶりです、魔王様」

「魔王？ 私が？」

「はい、貴方様はこの世界を支配する魔王です」

私は後ろでびっくりして腰を抜かしているハヤテを見た。

「ハヤテ、これは夢かしら？」

「分からない」

私は悪魔娘に向き直る。

「ここは一体どこなんですか？」

「お忘れですか？」

「いや、初めて来たんだけど」

驚いた顔をする悪魔娘。

「ピキー！」

「本当に忘れてるんですね。ご説明しましょう」

悪魔娘は語り出した。

その昔、レコンギスタというこの世界に魔王が現れ、世界を闇で覆った。そして勇者がそれを打ち払い、魔王をランタンに封じ込めたという。その魔王の名は偶然にも私と同じアテネ。しかも外見もそっくりだという。

「だ、大分思い出してきましたわ」

「アーたん!？」

悪魔娘がハヤテに近付く。

「誰よ貴方?」

「僕を忘れちゃったんですか? ヒナギクさん」

「誰よヒナギクって。私はデイジー・デビルークよ」

ヒナギクじゃん。

「で、貴方は何? 見たところ人間のようだけど魔王様とはどういう関係?」

「そいつは」

何にしようか。

いいなずけ

いいなずけ

いいなずけ

何だこの選択肢は……。

「私のいいなずけだ」

「ま、魔王様の!?! 失礼しました!」

デイジー・デビルークがハヤテから離れた。

「で、私はこれから何をすればいいの?」

「魔王様にはここから南にある村に行つて勇者の子孫に復讐をしていただきます」

「分かりましたわ。それで魔王軍は?」

「勇者に全滅させられてしまいました。残っているのは私とこのスライムと姉のロード・デビルークの三人だけです」

「貴方のお姉さんはどちらに?」

「人間の男性に恋して出て行きました」

「そうですか。では先ず手下を集めましょう」

「手下と言つても、魔物が残つてませんけど」

「そんなの人間の子どもをさらつて調教すればいいことですわ」

「アーたん、誘拐はよくないよ」

「お黙り！」

「……………」
「ハヤテは黙り込んだ。」

「デイジーさん、貴方の特殊能力とかは？」

「それは魔法のことでしょうか？ 一応攻撃専門の魔法は修得しています」

「誰かの体に乗っ取るとかそういうのは出来ないんですの？」

「可能ですよ」

「スライムさんは？」

「ピキー？」

「あ、この子喋れないんですよ」

「そうですね。それじゃあハヤテ、彼女たちと一緒に子どもをさらってきてちょうだい」

「誘拐はダメだよアーたん」

「ハヤテは私の言うことが聞けないんですの？」

ハヤテは躊躇う。

「アーたんは本気で殺るの？ 勇者の子孫を」

「当然ですわ。勇者に魔王が封印されたせいで私たちが喚ばれたんだから。それにもしかすると勇者の血筋を絶つのがこの世界での使命で、終われば帰れるかも知れないのよ」

「帰る？」

デイジー・デビルークが疑問符を浮かべながら首を傾げた。

「実は私、魔王じゃないんですの。この世界とは別のところから来たただの人間ですわ」

「魔王じゃないって、嘔吐いたのね？」

デイジー・デビルークが剣（カマ）を取り出す。

「いや、貴方が勝手にそう呼んだだけじゃない」

「問答無用！」

デイジーが襲いかかってきた。

「アーたん！」

私を庇ったハヤテが切りつけられて血飛沫が上がった。

「ハヤテ！」

「大丈夫だよ」

「ならいいですけど」

「魔王様を騙る貴方たちはここで殺す！」

「だからそれは貴方の勘違いで……」

しかしデイジーは聞いておらず攻撃してくる。

「邪魔！」

私はハヤテを横へ押し退けると、懐からナイフを取り出して剣を受け止めた。

正直、ナイフでは戦にくい。

私は辺りを見渡し、使える物がないか探す。あれだ！

「はあっ！」

私は剣を弾いた瞬間に部屋の隅に立て掛けられた古びた剣の下へ走って掴み取った。

「はああああ！」

私はデイジーの懐へ駆けて古びた剣で相手を切り裂こうとしたが、剣で受け止められると同時に古びた剣から金属が折れるような小気味良い音が鳴った。

「え？」

古びた剣の刀身が真っ二つに折れて床に突き刺さった。

「折れた!？」

私はデイジーの連続攻撃を後退してかわし続けた。だが、やがて壁に行く手を阻まれて逃げ場を失う。王手で詰みだった。

「覚悟しなさい！ この偽物が！」

デイジーが剣を振りかぶった。

私は死を覚悟した。

「イーナーーマーキーツク！」

「きゃあ!？」

ハヤテが真横からデイジーを跳び蹴りで吹っ飛ばした。

そう言えばこいつ居たな。忘れていた。

「不意打ちとはやるわね！」

「貴方の相手は僕です」

ハヤテが懐からカードリーダー付きの玩具のベルトを取り出して腰に装着した。

「そんなものでどうしようかと？」

「まあ見ててよ」

ケースから一枚のカードを取り出して構える。

「変身！」

「はあ？」

手にしたカードをバックルに装填するとマシンヴォイスが鳴る。

ハヤテ butler Hayate

刹那、ハヤテが光に包まれた。そして光が治まるとそこには

「何も変わってないじゃないのよ！ 変な期待させないで下さい！」

「だから黙って見ててって」

ハヤテはそう言って別のカードを取り出した。

「剣士には剣道少女です！」

手にしたカードをバックルに差し込む。

ハヤテ butler Hina giku

電子音と共にハヤテが再び光に包まれた。そして光が治まると、今度はそこに桂さんが現れた。

「変身魔法！？」

驚くデイジーをよそに桂さんが新たにカードを取り出して装填する。

Attack butler Bokutou masamu

ney

電子音と共にバックルから出現した木刀を桂さんが掴み取る。

「ふっ、そんな虚仮威しなんか」

デイジーが桂さんに攻撃を仕掛ける。

「ふんっ！」

桂さんが木刀で剣を受け止め、再び取り出したカードをバツクルに装填する。

「Attack butler White cherry」

それと共に出現した白桜でデイジーを切りつける桂さん。

「うっ……ああっ！」

デイジーの体から血飛沫が上がった。

「貴方のそんな魔法見たことも聞いたこともないわ。一体何なの？」

桂さんのバツクルからカードが飛び出して彼女がハヤテの姿に戻る。

「これは魔法ではなく科学です」

「科学って何よ？ 魔法より恐ろしいもの？」

「ええ、とつても。科学は魔法の領域を超えた存在です。迂闊に攻撃すると怪我じゃ済みませんよ」

「くっ……！」

デイジーが悔しそうな顔でハヤテにひざまずいた。

「何でも言うことを聞くのでお許し下さい」

「じゃあアーたんに謝って」

「分かりました」

デイジーが立ち上がりこちらへやってくる。

「先ほどはご無礼を申し訳ありませんでした」

「いいわよ別に」

「そうは参りません。この私を痛めつけて下さい」

私は遠慮せずにデイジーを蹴り飛ばした。

「あうっ！」

壁にぶつかって落ちた幸せそうな顔のデイジー。

「快感です」

マゾヒズムだった。

「ねえ、ハヤテ」

「何？ アーたん」

「貴方がしてるそのベルトは一体何ですか？」

「ああ、これは以前九つの世界を巡る時に手に入れたもので、仲良くなった人に変身出来るよく分からないもの」

「何そのデイケイド？」

「アーたんのもあるよ」

そう言つてハヤテがカードを取り出して描かれた絵を私に見せる。そこには金髪縦ロールの端正な顔立ちの少女の姿があった。

「私つてこんなに可愛かったのね」

「だから好きになつたんだよ」

「顔以外で好きなのところは無いんですの？」

「優しくて僕より強いところとか」

「女より弱い男つてどうなのよ？」

「僕は強い子が好き」

「では体鍛えてもつと強くならなくてはね。あと筋肉もムキムキに」

「それはちよつと……」

「それはそうと、さっきのいざぎさですすっかり忘れてたけど、子どももの誘拐に行つてきてちようだい」

私はそう言つとデイジーの下へ移動した。

「いつまで寝てるんですの!？」

デイジーの脇腹を蹴りつけた。

「ぐっ! 快感」

「起きなさい!」

「は、はい!」

デイジーが慌てて立ち上がった。

「ハヤテと一緒に村で子どもをさらつてくるのよ!」

「分かりました。えつと……アーたん？」

「くっ……その名前で呼ぶな!」

私はデイジーの顔面を殴打した。

「ぐわっ!」

ふらつくデイジー。

「早く行けよノロマが!」

「誰がノロマですって!?!」

「科学」

「うっ……」

「さっさと行け!」

「わ、分かりました。それと何て呼べば?」

「アテネでいいわ」

「魔王様と同じ名前……」

「私の世界にだってお前と同じ名前の人が居るわ! ぼけっとしてないで早く行け!」

「行きましようデイジーさん」

ハヤテがデイジーとスライムを連れて出て行った。

「アーたん凄いや!」

外でハヤテが叫んだ。

「何よ?」

扉を開けて倉庫を出ると、広大な面積の部屋がそこにあった。

「ひょっとしてあれが王座?」

部屋の奥にある椅子を指差す。

「そうです。まあ、魔王様が封印されてから百年間は誰も使ってませんけど」

「では私が新魔王としてあそこに座りますわ」

私は王座へと歩いていき座った。

「では新魔王アテネ様、これより人間の子どもたちをさらって参ります」

デイジーが私の前でひざまずいて言った。

「呉々も失敗はしないで下さい。まあハヤテが居ればそんな心配は無いですよけど」

「はい!」

ハヤテたちは私の前から去っていった。

それから刻一刻と時間が過ぎていき、眠気を感じた私は居眠りを始めた。

「……様！ アテネ様！」

聞き覚えのある声に私は目を開けた。正面には血相を変えたデイスリーの姿があった。

「何事ですの!？」

「近くの村で子ども捕まえていたらお役人に見つかってしまったんです！」

「それでどうしたのです!？ まさかハヤテに何か!？」

「私は何とか逃げ切ったんですけど、彼は豚箱に放り込まれてしまいました!」

「なんてこと……!」

私は席を立った。

「今からその村へ行きますわ。案内して下さい」

私はデイスリーと共にハヤテが捕まっている村へとやってきた。

ここコグレ村は閑静な村で人口は役五十人ととても小さい。

「そう言えばスライムさんはどうしたんですの?」

「ハヤテ様と一緒に」

「そうですか。兎に角様子を見に行きましょう」

「でも私この格好だし」

「心配には及びませんわ」

私たちは村の中へ入った。

「近くに黒い女の魔物も居る筈だ! 捜し出せ!」

「隠れましょう」

私たちは物陰に身を潜めた。

「居たか?」

「いや。そっちは?」

「こっちもだ。どこへ逃げたんだろうな」

岡っ引きと思しき人たちが忙しく行ったり来たりしている。

「これじゃあ出られませんよ」

「貴方、他人に乗り移れる能力がありましたわね」

「女性限定ですけどね」

「使えないわね」

「ゲールなら誰にでも入れたんですが」

「ゲール？」

「私と同じ悪魔でハヤテ様に似た男の子です」

その時、岡っ引きの一人がこちらに気付いた。

「誰か居るのか？」

近付いてくる岡っ引き。

バキッ！ 足下にあった枝を踏んづけて割れた。

岡っ引きが覗き込んでくる。

「魔物が居たぞ っ！」

見つかった私たちはあつという間に数人の岡っ引きに囲まれた。

「お前民間人だな？ なぜ魔物と一緒に居る？」

「ふっふっふ、私は魔王だ」

「何をふざけたことを？」

「魔王は百年前に勇者がランタンに封印した筈だ」

「そして今日、復活を遂げたのだ。我の名はアテネ。我を封印した

勇者の末裔に伝える。お前に復讐を果たすと」

「アテネだと！？」

「拙いぞ。本当に魔王なら科学とかいう不思議な力を使う筈だ」

「怯むな！ 戦え！」

その言葉と共に岡っ引きたちが攻撃を仕掛けてきて……

1・召喚魔王（後書き）

岡っ引きに見つかって困まれました。私たちがいきなりの攻撃に私たちは！？

2・新たな魔王（前書き）

二話目が完成致しましたので掲載させていただきます。
今回は私たち魔王軍が村の娘を襲っていた魔物を退治致しますわ。
それから、その内プローグを書くかも知れません。

2・新たな魔王

「魔物が居たぞ　っ！」

私たちは見つかり、あつという間に囲まれた。

「お前民間人だな？　なぜ魔物と一緒に居る？」

「ふっふっふ、私は魔王だ」

「何をふざけたことを？」

「魔王は百年前に勇者がランタンに封印した筈だ」

「そして今日、復活を遂げたのだ。我の名はアテネ。我を封印した勇者の末裔に伝える。お前に復讐を果たすと」

「アテネだと!？」

「拙いぞ。本当に魔王なら科学とかいう不思議な力を使う筈だ」

「怯むな！　戦え！」

その言葉と共に岡っ引きたちが攻撃を仕掛けてきた。

「ぐっ……ああっ！」

八方からの攻撃に避けることが出来なかった。

「アテネ様！」

デイジー・デビルークが剣を取り出す。

岡っ引きたちがデイジーへ攻撃を仕掛ける。

多勢に無勢。彼女は捕らえられた。

「放しなさいよ！」

岡っ引きたちの手の中で暴れるデイジー。

「貴方、攻撃魔法使えるんじゃないかなかったですの？」

「ごめんなさい。あれ口だけなんです。私に出来るのは人間の女性に乗り移ることだけ」

やはり使えない手下だった。

「魔王、手下を殺されたくなければ一緒に来い」

私は懐をまさぐった。あるのは携帯電話のみだが、果たして使い物になるかどうか。

「これを見る！」

私は岡っ引きたちに携帯電話を見せつけた。

「何だそれは!？」

「これは近くにある物質を消すことが出来る秘密の道具だ。そいつを放さなければお前たちを消すことになるぞ?」

「そ、それが科学か?」

岡っ引きたちは怯え始めた。

「どうする?」

「……分かった。要求をもう。その代わり村の子どもたちには手を出すな」

「ちっ。仕方ない」

私が携帯電話を仕舞うと同時にデイジーが解放される。

「お前たち、退くぞ！」

岡っ引きたちは去っていった。

「アテネ様のお陰で助かりました。さっきの何なんですか?」

「携帯電話という遠くに居る相手とお話をしたり手紙の遣り取りをする電子機器ですわ。実際あれで人は消せないんですよ」

「つまりハツタリですか」

「そういうことですね」

「あら?」

デイジーが茂みの中に入って行く。

「アテネ様、こんなものが落ちてましたけど」

デイジーが茂みの中からバツクルとカードアルバムを拾ってきた。

「これハヤテ様ですよ。きっと捕まった時に態と隠していったんですね」

「いや、よく似てるけど微妙に形が違いますわ」

「へ? 私には分かりません」

「ちよつと貸して下さる?」

私がバツクルを掴み取ると同時に背後に人の気配。

「誰?」

振り返ると見知らぬ少年が一人立っていた。

「僕は恋崎 ハヤテ」

「ハヤテ？」

「バツクルとカードを見つけましたね。それを使ってこの世界を作り替えて下さい」

恋崎 ハヤテはそう言うと灰色のオーロラの中に消えていった。

私はカードアルバムを調べた。

中からハヤテや桂さん、それに色々な人の絵が描かれたカードが出て来る。これをバツクルに差せばハヤテみたいに変身出来るのだろうか。

「ところでアテネ様、ハヤテ様は助けないでいいんですか？」

「あ、すっかり忘れてましたわ。この村の役所に行きましょう」

「でも役所がどこにあるか……」

「探せばいいことですわ！」

私はバツクルとカードアルバムを仕舞うと、デイジーと共に村の探索を始めた。

昼間だというのに人っ子一人居ない。先ほどの騒動があったのだから当然か。

「またお役人呼んで付いていくつてのはどうですか？」

「では立てこもり事件でも起こしますか」

私は辺りを見渡した。その時。

「脱獄だ つ！」

その声に追われながら、ハヤテが私たちの前を駆け抜けていく。

「全く、しつこいですね！」

「ハヤテ！」

私たちはハヤテの下に駆けた。

「アーたん！」

「脱走なんかしなくても私が助けに行きましたのに」

「おい、魔物も居るぞ！」

「戦いますわよ、ハヤテ！」

「でもあいつら魔法とか使ってきて適いつこないよ!」

「逃げてどうするの。私たちは新魔王軍よ。やつらを叩きのめしてこの村を征服しますわよ」

私たちは立ち止まって振り返った。正面に岡っ引きたちがやってくる。

「そいつはお前の仲間だったのか!？」

「よくも私のハヤテを可愛がってくれたわね。後悔させてあげますわ」

そう言つて私はベルトを装着する。

「アーたん、それは?」

カードアルバムから桂さんのカードを取り出した。

「変身!」

手にしたカードをバツクルに差し込む。

☆ Summons butler Hinagikku ☆

マシンヴォイスが鳴る。だが私の体に変化は無かった。代わりにバツクルから人の形をした灰色のシルエットが現れ、それが桂さんになる。

「あれ? ここどこ? 私生徒会室に居た筈よ?」

辺りをキョロキョロと見渡す桂さん。

ベルトの機能を理解したところで私は声をかける。

「桂さん」

桂さんが振り返った。

「天王州さん。それにハヤテくんまで。ここは一体どこなの?」

「ここはレコンギスタといって私たちが居たのとは違う世界ですわ。私はこの世界で魔王として勇者の血筋を絶つたために旅をしているの。勇者の子孫を葬った暁にはこの世界を私だけの物にしますわ」

「世界征服なんて私が許さないわよ」

「桂さん、彼らを叩きのめしていただけます?」

「魔王の目的のために戦うなんて嫌よ。けど、どいう訳か逆らえないのよね」

桂さんはそう言って岡っ引きたちに向かっていく。

「正宗！」

桂さんが手を掲げた瞬間、

「あら？」

何も起きなかった。

「どうして来ないのよ!？」

ひよっとして私が出すのだろうか。

「ちよっと天王州さん！ 正宗が来ないわよ！ どうなってんの!？」

えっと、正宗……。

私はカードを幾つか取り出して探す。

「ちよっと！ もたもたしてないで何とかしなさいよ！ ……って、危ないわね！」

桂さんが岡っ引きたちの攻撃をかわす。

私は正宗のカードを見つけると、それをバツクルに装填した。

Attack butler Bokutou masamune }

マシンヴォイスと共にバツクルから木刀の正宗が出現して桂さんの手元へ飛んでいった。

「来るのが遅い！」

桂さんは正宗を振るって岡っ引きたちを次々に薙ぎ倒していく。

そして全員を気絶させて私たちの下へ戻ってきた。

「魔物を召喚出来るなんて凄いですね、アテネ様」

「誰が魔物ですって!？」

桂さんがデイジーを睨め付ける。

「って、よく見たら私にそっくりじゃない」

「デイジー・デビルークよ。貴方は？」

「桂 ヒナギクよ。同じ名前なんて偶然ね」

「同じじゃないわよ」

「デイジーとヒナギクは同じでしょ」

「何言ってるのよ。全然違うじゃない」

「頭のいい皆さんなら分かるかも知れませんが、デイジーはヒナギクの英語ですわ」

「アーたん、誰に話してるの？」

「読者の皆様にですわ」

「ハヤテが首を傾げた。」

「桂さん、ちよっといいかしら？」

「何よ？」

「そこで三回回ってワン」

「桂さんはその場で三回回った。」

「ワン！」

頬を赤らめる桂さん。どうやらベルトで召喚された者は私に忠実のようだ。

「……って、何させるのよ!？」

その時、桂さんの体が灰色のシルエットになり始めた。

「ちよっ、今度は何なの!？」

「どうやらお別れみたいね」

桂さんの体が完全にシルエットになると、その場で消滅した。い

や、この場合は時間切れで強制送還されたといふべきだろうか。

「ヒナギクさんが消えた!？」

「元の世界に戻っただけだから安心しなさい」

「うっ……くそっ!」

「何なんだあの女!？」

後ろで岡っ引きたちが目を覚ました。

私たちは彼らの下へ歩み寄った。

「魔王……!」

「貴方たち、私にひざまずきなさい」

「誰がお前なんか」

「もっ少し痛めつけないと分からないのですか？」

岡っ引きたちは後退る。

私はカードを幾つか取り出し、その中に和服を着た女の子のカードを見つける。

「ハヤテ、これは誰のですの？」

「霊能力者の鷺ノ宮 伊澄さん。前にアーたん^{たんと}と戦った筈だけど」

「私がミダスに乗っ取られていた時ですね。思い出しましたわ」

私は伊澄のカードをバツクルに装填した。

「Summons butler Issumi」

マシンヴォイスと共にバツクルから灰色のシルエットが現れて伊澄の姿になる。

「あれね？ ここはどこですか？」

「鷺ノ宮さんね。貴方をお願いがあるのだけど」

「はい？」

伊澄が振り向く。

「えっと、確か理事長さん？ 私にお願いって何でしょう？」

「私は今、斯く斯く然々で旅をしているの。それで手下を増やそうと思っただけど、彼らがかしずいてくれなくて」

「そうですか。……では魔物を召喚して彼らに憑依させましょう」

伊澄はそう言つと足下に魔法陣を書き出した。そして様々な怪物を出現させた。

「皆さん、あの方たちの体に乗っ取って下さい！」

伊澄が言つと怪物たちが岡っ引きたちへ向かっていく。

「魔物だ！」

「やっつける！」

岡っ引きたちが攻撃しようとする、怪物たちは彼らの体内に侵入した。

岡っ引きたちの体に乗っ取った怪物たちが伊澄の下へ集まる。

「皆さん、これからこの方の下でしっかり働くのですよ」

伊澄が言いながら彼らに私を指し示す。

「ところで、私はどうして理事長さんの言っなりになってるのですよ」

「それはきつとこのベルトのせいね」

伊澄がバツクルを凝視する。

「これには不思議な力を感じます。その力が召喚した者を理事長さんの思い通りに出来るようにしているのでしょうか。では私はこれで失礼します」

伊澄は灰色のシルエットとなり消失した。

「貴方たち、私にひざまずきなさい！」

私が命令すると岡っ引きたちは一斉にひざまずいた。

「アテネ様、何なりとご命令を」

「私名乗りましたっけ？」

「この体の記憶を読みとつたのです」

「ではやることは分かっていますわね？」

「はい。百年前にアテネ様を封印した勇者の末裔に復讐をする、と
いうことでしたね？」

「ええ、そうですわ」

「それを勇者の末裔に伝えるのでいいんですよ？」

「もちろんですわ」

「では早速使いの者を向かわせます」

岡っ引きたちは去っていった。

「お二人とも、今日はこの村に宿を取りますわよ」

「それは構わないけど、泊めてくれるかな？ 僕たちのこと、きつと村中に知れ渡ってると思うんだけど」

「その時はぶっ飛ばして言うことを聞かせるだけですわ」

「やっぱりそうなるんだ」

「さあ、宿屋を探しますわよ」

私たちは宿屋を探し始めた。しかし、いつまで経ってもそれは見つからない。私は半ば怒りを感じていた。

「アテネ様、こんなのがありますよ」

デイジーが掲示板を見つけた。そこには指名手配された私たちの絵が貼られていた。

「やっぱり知れ渡ってるね」

「もしかするとこれが原因で看板を仕舞ってるのかも知れませんか」

「ハヤテ、建物を一つ一つ回って中を確認してきて下さい」

「うん、分かった」

歩き出したハヤテが立ち止まる。

「ねえ、アーたん。あれ何だろう？」

「え？」

私はハヤテが指を差した先を見た。そこでは私たちと同じぐらいの少女が緑色のドラゴンに襲われていた。

「デイジーさん、一つ訊きますけど、魔物は貴方とお姉さんとスライムさんの三人だけで後は全部滅ぼされたのですよね？」

「ええ、その筈ですけど」

「ではあれは何ですか？ どう見ても魔物ですわよ」

「ひよつとしたら新たな魔王が誕生したのかも知れません」

「誰か　っ！」

魔物に襲われている少女が助けを求め。

「あんなの放つといて早く宿屋を探しましょう、アテネ様」

「いいえ、助けますわ。そうすることで宿屋まで案内してくれるかも知れませんからね。行きますわよ！」

「そんなゲームみたいなこと現実に起こるわけが」

私たちは少女を助けるために魔物の下へ駆けつけた。

「おやめなさい！」

振り返るドラゴン。

「何だお前たちは？ 俺の邪魔をしようというのか？」

「この世界の魔物は滅びた筈ですわ！」

「確かにお前の言う通り魔物は百年前に滅びた。だが最近になってまた現れたのだよ。その答えが分かるか？ 新たな魔王がこの世界に降臨したのだ」

「ではその魔王に伝えなさい。この世界はここに居るこの魔王アテネ様の物だとね」

「お前が百年前に勇者の手によってランタンに封印されたアテネ？」

「そうですね」

「ちよつとアテネ様、嘘はダメじゃないですか」

「お黙り！」

「はい！」

「ふん、何だか知らんが、俺の邪魔をしたことを後悔させてやる」

ドラゴンが戦闘体勢に入った。

「ハヤテ、デイジーさん！」

私たちは構えた。

私のコマンド。どれにしよう。

たたかう

さくせん

いれかえ

にげる

私は”たたかう”を選択した。次のコマンドが展開。

こうげき

じゅもん

とくぎ

どつぐ

ほつぎよ

取り敢えずここは”こうげき”か。

ハヤテのコマンドが展開。

こうげき

じゅもん

とくぎ

どつぐ

ほつぎよ

ハヤテも”こうげき”だ。

デイジーのコマンドが展開。

こうげき

じゅもん

とくぎ

どつぐ

ぼつぎよ

デイジーも”こつげき”にして様子を見よう。

敵の攻撃。

私に十のダメージ。

残りHPは五。死にそうですわ。

私の攻撃。

敵に二のダメージ。

ハヤテの攻撃。

敵に一のダメージ。

デイジーの攻撃。

会心の一撃！ 敵に十のダメージ。

「なかなかやるな」

コマンド展開。

たたかう

さくせん

いれかえ

にげる

面倒臭いから”さくせん”で”ハヤテ”を”バッチリがんばれ”

にして”デイジー”を”ガンガンいこつぜ”に。そして”たたかう

”でコマンド展開。

こつげき

じゅもん

とくぎ

どつぐ

ぼつぎよ

次は”とくぎ”を開いてみよう。

しょうかん

その”しょうかん”に即決。私はベルトを着けてカードを二枚取り出した。その内一枚をバツクルに装填。

「Summons butler Hinagikuu」
バツクルから現れた灰色のシルエットが桂さんになった。

「今度は何の用？」

「あのドラゴンを倒して下さるかしら？」

私はそう言つて残りのカードを装填した。

「Attack butler Bokutou masamune」

正宗が出現して桂さんの手に収まる。

「あいつを倒せばいいのね？ 私に任せといて」

桂さんが単身ドラゴンに攻撃を仕掛ける。

ドラゴンに五百のダメージ。

「ぐおっ！」

ドラゴンは倒れた。

二十の経験値を手に入れた。

私のレベルが二になった。

ハヤテのレベルが二になった。

デイジーのレベルが二になった。

桂さんは最強のシモベね。

「あ、あの、貴方は魔王のアテネさんですよ？ どうして助けてくれたんですか？」

「目の前で誰かが危険な目に遭っていたら助けるのが普通じゃありません？」

「世界征服を企む魔王アテネ様が人助けね……」

「桂さん、まだ居たんのですの？」

「読者の大半が私のファンよ。だから居てあげてるの」

「貴方はもう用済み。帰つて下さる？」

「天王州さんの命令じゃ帰らない訳にはいかないわね。ところで、

明日の執事大会までには帰ってくるんでしょうね？」

「たぶん無理ですわ」

「困るわ。もうエントリー済みよ」

「えっ、アーたん執事大会に出るつもりだったの？」

「ええ」

「そうなんだ。実は僕も出る予定だったんだけど、この様子だと無理かな」

「あ、そうだ。もしかすると明日の大会は中止になるかも知れないわ」

「どうして？」

「葛葉理事長が失踪してしまったの」

「そうですか。では私も当分の間は戻れそうもないので貴方に理事長を代理してもらいますわ。もちろんやって下さるわよね？」

「冗談じゃないわ！ こっちは今生徒会の仕事で大忙しなのよ！」

「私の命令が聞けないと？」

「うっ……分かったわよ。引き受ければいいんでしょう？」

「うん、お願いね」

桂さんは悔しそうな顔で灰色のシルエットとなり消え去った。

私は魔物から助けた少女に向き直った。

「貴方に一つ訊きたいことがあるのですが」

「な、何でしょう？」

「この村の宿屋はどちらにあるのですか？」

「宿屋は私の家ですけど、あなた方はその、お尋ね者の魔王軍ですし……」

「ちよつと貴方！？ 私たちは魔物に襲われてる貴方を助けて差し

上げたのですよ！？ それなのに宿の一つ貸して下さらないってど

ういうことなのですの！？ 貴方は私たちに野宿をしろと言うのですか

！？

「ひええ！」

怯える宿屋の娘。

「アーたん、諦めようよ」

「お黙り！ 元とは言えばお前が豚箱に放り込まれたのが悪いんだろっが！」

「アーたん、抑えて」

「あの、こちらの条件をのんでいただけるのであればご案内致しますけど？」

「どんな条件ですか？」

「何もしないで下さい」

「約束しましょう」

「ではご案内します」

私たちは宿屋の娘と共に宿屋へとやってきた。

「お部屋は皆さんと一緒にいいですよ？」

「構いませんわ」

「一晩十五ギルガメツシユになります」

「私たち、お金を持っていないのですが」

「それでは泊められませんね。魔王といえどお客様ですので。お帰り下さい」

「私たちは貴方の命の恩人ですわよ。その方たちからお金を取ろうと言つのですか？」

「だって商売ですから」

「そうですね。ではこうしますわ！」

私は宿屋の娘の顔を思いつ切り殴打した。

「ちよつとアーたん！？」

「痛！ 何するんですか！？」

「貴方がサービスしてくれないからですわ！」

「やっぱり魔王軍なんて信用出来ません！ 出て行って下さい！」

私は娘の頭を掴んだ。

「アーたん、何する気？」

「この子の頭をちよつといじりますわ」

「そんなこと出来るの？」

「昔、貴方に力を与えてあげたでしょ？ その応用よ」

「私は娘の脳に念を送った。」

「さあ娘さん、私たちに部屋を一つ貸しなさい」

「はい、分かりました」

娘は私たちを部屋へ案内した。そこは少し狭いが、三つのベッドがあった。

「ではごゆっくりと」

娘は去っていく。私はベッドに腰を掛けた。

「あの、アテネ様は一体何者ですか？」

「魔王ですわ。ところで、何か足りない気がしません？」

私は人数を確認する。

私を含めハヤテとデイジーの三人パーティ。もう一人誰かが居たような気がする。

「ああ！ スライムのことすっかり忘れてました！」

「スライムさんはどこですのハヤテ？」

「えっと、確か僕と一緒に捕まって……檻の中だ！」

「ハヤテ、直ぐに連れてきなさい！」

「ええ？ 明日にしようよ。今日はもうクタクタで」

「行かなきゃ絶交しますわよ」

「うっ……分かったよ。行ってくるよ」

ハヤテは嫌々と部屋を出て行く。

「私も一緒に行きますハヤテ様」

デイジーが付いていった。

一人残された私はベッドに横たわった。

「お風呂はあるかしら？」

私はベッドから降りると、部屋を出てフロントに向かう。

「娘さん、ここってお風呂は無いんですの？」

「お風呂って何ですか？」

お風呂は諦めよう、うん。

私は部屋に戻り、再びベッドに横たわった。

やがて眠気が現れ、私は目を瞑った。

「……様、アテネ様」

朦朧とする意識の中、デイジーに呼ばれて目を開けた。

「スライムさんはどうしました？」

「それが……」

デイジーはスライムが旅芸人に買い取られて連れて行かれしまったことを話した。

「そうですか。そう言えばハヤテは？」

部屋を見渡すとハヤテがベッドで爆睡していた。

「とても疲れてたみたいですよ」

ふと窓の外を見ると、空は暗くなっていた。

「もう夜？」

「アテネ様、私たちが戻ってきたころには寝ておられましたよ」

「そう。……って、さっきから何を持ってるんですの？」

「村のお店で買った武器ですけど」

デイジーが剣と盾を見せる。

「これ、アテネ様のために買ったんですよ」

「それはいいとして、お金はどうしたんです？」

「ハヤテ様と一緒に人助けして貯めたんです。人助けするのって気持ちがいいですね」

それから と続けるデイジー。

「村役場でモブハンターに入りました」

「モブハンター？」

「世界中から集まってくる依頼で、その依頼内容にあるお尋ね者モンスターを退治して回る職業です」

「私たちは魔王軍ですわよ。どうしてそんなのに入ったんですの？」

「ハヤテ様が入りたいと仰ったのでそれに従いました。アテネ様の名前も登録してありますよ」

ハヤテは何を勝手に……。

「これ置いときますね」

デイジーが剣と盾を床に置いて自分のベッドに着く。

「ではお休みなさい」
デイジーは就寝した。
私も眠りに就いた。

3・伝説の盾エクシード（前書き）

魔王アテネ様の魔王城へよくきた。

ん？ お前たちはここに来るのは三度目だな。そんなに私の手下として働きたいか。ならばお前たちに入団試験を出そう。

先ずこの小説の感想を書け。そしてレビューをするのだ。そうすれば兵士に採用して差し上げますわ。

うん？ 何ですのハヤテ？ ……朝ご飯が出来たから来い？ 私に命令するんじゃないやありません！

3・伝説の盾エクスード

夜が明けた。目を開くと、二人はもう起きていた。

「よく寝てたね。もう十一時だよ」

「私そんなに寝てましたの？」

「さあ次の町を目指しましょう」

「その前にお手洗いよろしいかしら？」

私は二人に断ってトイレに入った。

下半身を露わにして座り尿を排泄。って、読者の皆様の前で恥ずかしいですわ。

私は頬を赤らめながら備え付けられている筈の紙に手を伸ばす。ところが、ある筈の紙がどこにも無いのだ。

「あれあれ？ ちよつとハヤテ！ 紙が無いですわ！」

この世界の方々は一体どうやって拭いているのでしょうか。まさか弥生時代のようにこの木の棒で？

「じゃあ僕のポケットティッシュで」

ハヤテが扉の前に立つ。

「開けるよ、アーたん」

ガチャリとハヤテが扉を開ける。鍵をかけていなかった。

「あ……」

ハヤテの頬が赤くなる。

「うわあ、ごめん！」

慌てて後ろを向くハヤテ。彼はそのままの姿勢でポケットティッシュを渡してくる。

「全く、急に開ける人が居ますか！ このバカちゃんか！」

私はポケットティッシュを半ば強引に奪い取ると、ハヤテを蹴り飛ばして追い出し、扉を閉めて施錠した。

「後で折檻してやりますわ！」

「だからごめんってアーたん！」

私はティッシュでお尻を拭くと、それを便器に投げ込んだ。
えっと……レバーは？

私は水を流すためのレバーを探した。

「ハヤテ、レバーはどこですか？」

「ああ、そのトイレ流せないんだ」

「後始末は誰がするんですの？」

「チエックアウト後に宿屋の娘さんが掃除するみたいだよ」

「そうなんですの？」

「そうなんですの」

私はパンティとスカートを穿くとトイレから出た。

「はい、アテネ様」

デイジーが装備を差し出してきた。

私は鞘に収められた剣を背負い、盾を左手に持つ。

ダダダダダダダダダダダダダダダ

そんな嫌な音楽と共に私は呪われてしまった。

「ちよっとこれ呪われてますわよ？」

「しょうがないよ。闇市でしか買えなかったからね。普通のお店じ

や僕たちに売ってくれなかったんだ」

「その闇市に案内して下さいませ？ 殴り込みに行きますわ」

「そんな殺生な！」

「嫌だと言っならこれを使いますわよ？」

私はハヤテのカードを取り出した。

「そう言えばそれ使ったらどうなるんだらう？」

同感だった。これを使ったら別世界のハヤテがやってくるのか、

ここに居るハヤテが消えてバツクルから出現するのか。

「試しに使ってみますわ」

私はベルトを装着すると、ハヤテのカードをバツクルに差し込んだ。
だ。

⌋ Athens butler Hayate ⌋

他のカードとは異なる音声。その刹那、私の体が光に包まれてハ

ヤテの姿になった。

「私の変身カード？」

「アーたんが僕に？」

私はバツクルからカードを抜き、元の姿に戻った。

「そのカード、九つの世界に九人のハヤテが生まれたことに何か関係あるのかな？」

「九人のハヤテ？」

「アーたんには話してなかったね。僕のベルトとカードは以前に九人のハヤテの内の一人の恋崎　ハヤテと出会った日に見つけたんだ」

「そのハヤテになら私も会ったことがありますわ。そんなことより早く闇市へ行きましょう」

私たちは宿屋を後にすると、怪しげなお店が並ぶ闇市場へとやってきた。

「一応訊くけど呪われてるのはどれ？」

「盾ですわ」

「じゃあ防具屋だね」

私たちを先導するハヤテが防具屋の前で止まった。

「いらつしゃい」

筋骨隆々な売人と目が合う。

「これはこれは魔王アテネ様。一度お会いしたかったんですよ」

「ちよつと貴方？　この盾呪われてますわよ？」

「ええ、そうすればお会いできると思ひまして」

「それってどういうことですか？」

「昨日、宿屋の娘を助けてくれましたでしょ？　あの子は私の娘でやして、そのお礼をしようと来ていただいたのです」

「兎に角この盾はお返し致しますわ！」

私は売人に盾を投げつけた。

「痛！」

「それで、お礼というのは何ですか？」

「これです」

売人が黄金に輝く盾を取り出した。

「それは？」

「覚えておられませんで？」

「全く」

「これは百年前にアテネ様を封印した勇者が装備していた伝説の武器の一つでエクシードと申します。これをアテネ様に差し上げたいと思います」

「伝説の盾ですか」

私とその盾に触れた瞬間、それは輝きを失い漆黒に染まりダークエクシードとなつてしまった。

「これは凄い！ 邪心に満ちている……」

「有り難く頂戴ちやうだい致しますわ」

私はダークエクシードを装備した。

「噂によるとアテネ様は勇者の血筋を絶つために旅をしてるとのことです？」

「ええ、まあ」

「応援してますよ。必ずや勇者の子孫を倒して再び世界を闇で覆い尽くして下さい」

「貴方は闇がお好きなんですか？」

「闇商人ですから」

ニヤリと笑う売人。私は彼の本性を見た気がした。鶏のような姿をした茶色の怪物を。

「貴方まさか魔物！？」

「それはどうでしょう」

それと 彼は続ける。

「伝説の剣エクスカリバーがどこかの洞窟の奥深くに眠っていると噂ですぜ」

「それも黄金に輝いていたりするんですの？」

「それはご自分の目でお確かめになってはいかがでしょう？」

「ハヤテ、デイジーさん、行きますわよ」

私は二人を連れて村を離れた。

「アテネ様、この先に町がありますよ」

デイジーが後ろで世界地図を広げていた。

私は立ち止まって世界地図を覗く。

「因みに今居るのはここです。ですから、ここから南西に行けば町があります」

デイジーがある場所を示す。そこには見たこともない文字が書かれていた。

「何て読むんですの？」

「ネリマーと書いてあります」

「練馬？」

私とハヤテは同時に言葉を発した。

「いえ、ネリマーです。因みにネリマーを抜けるとスギナーミという大都市がありますよ」

その時、私は何者かの気配を感じた。

「グワオ！」

チーターを彷彿させる黄色の魔物がこちらが身構える前に襲いかかってきた。

「危ない！」

ハヤテが私の前に立ち鋭利な爪で引っかかれた。

「ぐわっ！」

夥しい量の血飛沫。

「くっ……！」

ハヤテがその場で膝をついた。

「大丈夫!？」

「うん、平気……痛！」

私は魔物を睨め付ける。

「ハヤテの仇！」

私は背中の鞘から普通の剣を抜いて魔物に切りかかった。

シャキーン！ 魔物に五のダメージ。

魔物の引っかき攻撃。

私は盾で防いだ。

魔物は様子を見ている。

私は魔物を切りつけて四のダメージを与えた。

魔物の攻撃。

痛恨の一撃で私は二十のダメージを受け、残りHPが二となつてしまった。非常にピンチですわ……。

「アテネ様、召喚を！」

「そうね……」

私はベルトを装着すると、カードを取り出してバツクルに差し込んだ。

☆ Summons butler Hinagikku ☆

バツクルから現れた灰色のシルエットが桂さんになる。

「ちよつと今授業中よ!？」

魔物の攻撃。

桂さんはダメージを受けない。

「桂さん、あの魔物をやつつけて下さるかしら……」

「あんな雑魚にやられてるようでは魔王なんて勤まらないんじゃない?」

「五月蠅いですわね! 早く倒しなさい!」

桂さんは手にしたシャープペンシルで魔物に五のダメージを与えた。

「ちよつと貴方!?! 昨日は三桁行きましたよね!?!」

「シャーペンじゃダメージは与えられないわ」

魔物が桂さんに飛びかかる。

桂さんにゼロのダメージ。

「天王州さん、剣を貸して!」

私は桂さんに剣を渡した。

「はああああ!」

桂さんが魔物を切りつけた。

会心の一撃で魔物に百のダメージ。
魔物は桂さんの首筋に噛みついた。

「ぐっ……!!」

桂さんは麻痺して動けない。

魔物は桂さんを引っかいた。

桂さんにゼロのダメージ。

「ごめん、もう時間みたい」

「え？」

桂さんが灰色のシルエツトとなり剣を残して消え去った。

間髪を容れず魔物が攻撃を仕掛けてくる。

「アーたんは僕が守る！」

立ち上がったハヤテが私を庇う盾となった。

「ぐっ……!!」

痛恨の一撃でハヤテに二十五のダメージ。

「ハヤテ、私になんか構わなくていいですわ！」

「こんなところでアーたんを死なせる訳には行かない」

「でもそれじゃ貴方が死んでしまいますわ！」

「アーたんのために死ねるなら本望だよ」

魔物の攻撃を受け、遂にハヤテは倒れた。

私は剣を拾って魔物の頭に突き刺して息の根を止めた。

「アテネ様、呼吸が！」

剣を鞘に収めてハヤテを抱き起こす。

「ハヤテ、目を開けて！」

しかしハヤテはぐったりとした状態のまま返事をしない。

「ハヤテ！ ハヤテ！」

「この先の町の教会に居る神父さんに頼んで生き返らせてもらいましょっ」

「人を生き返らせるなんて神を冒瀆する行為ですわ。それにそんなの不可能に決まっていますわ」

「科学では生き返らせられないんですか？」

「魔法なら可能だと言っんですの!？」

「可能ですよ」

「じゃあ参りましょう」

私はハヤテを背負うと次の町を目指した。

「ウキキ！」

突然、猿のような魔物が私たちの前に現れた。

私はハヤテを降ろすと剣を抜いて魔物に切りかかった。

「キキー！」

魔物が反撃してきた。

「きゃああああ！」

残りのライフを視野に入れていなかった私はHPがゼロになり視界がブラックアウト。

「アーたん！」

聞き覚えのあるその声に目を開けると、ハヤテが心配そうに私を見据えていた。

「ここは天国？」

「何言ってるの？ まだコグレ村の宿屋だよ」

「へ？」

起き上がり辺りを見渡すと確かに先ほど発ったばかりの宿屋の入室だった。

「アーたん、大丈夫？ かなりうなされてたよ」

あれは夢だったのか。

「ええ、ハヤテが私を庇って魔物に殺される夢を見てね」

「そう言えば僕もアーたんを庇いながら死んだような気がするよ」

「夢でしょ？」

「それはそうだけど。でも同じ夢を見るなんて凄いな。何か運命を感じるな」

「.....」

私の頬が赤らんだ。

「ところでその黒い盾は？」

ハヤテが左手に持っていた盾を見やる。それは夢の中に出て来たコグレ村の闇市場で売人からもらったダークエクシードだった。これは元々、黄金に輝く盾だったが、私が触れた瞬間に漆黒に染まった伝説の武具の一つのエクシードである。

「私、闇市場になんか行ってませんよね？」

「行ったのは僕とデイジーさんだけだよ。そこでアーたんにあの剣と盾を買ったんだけど」

ハヤテが部屋の隅に置かれた剣と盾を指差した。それは今、私が背負っている剣と夢の中で売人に投げつけた呪われている盾だった。

「あの盾は呪われていますわ」

「そんなまさか」

「装備してみれば分かることですわ」

ハヤテが部屋の隅に行き、盾を装備して呪われた。

「うわっ、本当に呪われてる！」

ハヤテは盾を外そうとするが外れない。

「アーたん、どうしよう？」

「ネリマーの教会で神父さんに呪いを解いてもらうしかありませんね。デイジーさんが起き次第出発しますわよ」

「そう言えば僕、夢の中でネリマーに行く途中だった気が」

「奇遇ですわね。私もです」

「う……………うん？」

デイジーが目を覚まして体を起こした。

「あ、二人とも先に来てたんですね」

「はい？」

「ここ地獄ですよね？」

「いや、まだコグレですけど？」

「へ？」

デイジーは辺りを見渡すと、安堵の溜め息と共に胸をなで下ろした。

「夢だったみたいですわ」

「一体どんな夢を見たんですの?」

「村を出た後、ハヤテ様が魔物に殺られて、その後にアテネ様も後追い自殺を図りました」

私とハヤテは驚いて顔を見合わせた。

「どうしたんですか?」

「三人一緒に同じ夢を見るなんて奇跡としか言いようがありませんわ。それにこの盾」

「それ夢の中の闇市場で手に入れた伝説の盾じゃないですか!」

「ではあれは夢であって夢じゃなかったということですよ!」

不思議なこともあるものだ。現実と夢がリンクしているなんて。

「兎に角出発しますわよ。ハヤテが呪われたのでネリマーへ向かいます」

私たちは準備をすると、コグレ村を離れてネリマーへ向かった。

「確かこの辺りでチーターの魔物と出会すんでしたわね」

私はベルトを取り出して装着した。それと同時にチーターの魔物が姿を現す。

「今度は死なせないわよ」

私はカードをバツクルに装填した。

☆ Summons butler Hinagiku

マシンヴォイスと共に着替え中の桂さんが現れた。

「何でこのタイミングで喚ぶのよ!」

魔物が桂さんに攻撃。

「きゃあ!」

桂さんは五のダメージを受けた。

「貴方にプレゼントをあげますわ」

私はバツクルにカードを装填した。

☆ Attack butler Wite cherry

バツクルから飛び出した白桜が桂さんの手に収まる。

「その前に服を着させて!」

「いちいち文句の多い召喚獣ですわね! これでどうお!」

私は桂さん専用のカードを幾つか取り出し、一枚を選んでバックルに装填した。

△ Form butler Hinagiku toorisu
garino herosan }

そのマシンヴォイスと共にヒーローシヨのヒーローの着ぐるみを身に纏う桂さん。

「なっ！？ よりによって何でこれ！？」

「あれは謎のヒーローさん！ その正体はヒナギクさんだったんですか！？」

「恥ずかしいから誰にも言わないでよ！」

桂さんが魔物へ攻撃を仕掛ける。

会心の一撃で魔物に千二十五のダメージ。

魔物は倒れた。そして間髪を容れずに次の魔物が襲ってくる。猿の魔物だ。

桂さんは素早く避けると、猿に攻撃した。

猿はひらりとかわして桂さんの仮面を引っかくが、逆に自分の爪が折れてしまった。

「キー！」

怒った猿が桂さんに体当たりをする。

「うわっ！」

蹠^{ソク}踉めく桂さん。

「やったわね！」

白桜を振るう桂さん。だが素早い動きでかわされて当たらない。

「天王州さん、正宗を出して！ あれならこいつの速度に追い付けるわー！」

私は手下の要望に応える。

△ Attack butler Bokutou Masamu
ne }

正宗が桂さんの手に収まる。

「ちょこまかとー！」

桂さんは目にも留まらぬ速度で猿を叩いて叩いて叩きまくる。

猿の魔物はライフゲージがゼロになり倒れた。

「もう来ないわね？」

桂さんが周囲を確認する。

「貴方が居てくれるので助かりますわ」

「魔王様のお役に立てて何よりだわ。それで、今どの辺なの？」

「最初の村を出発したばかりですわ。そっちの状況はどうなってますの？」

「理事長の仕事って思ったより大変なのね」

「あら、ちゃんとやってくれてるのですね」

「だって天王州さんの命令じゃない。命令には従わないと」

「偉いですわ。誰かさんとは大違い」

私は横目にハヤテを見やる。

「それって僕のこと？」

「誰も貴方とは言ってませんわ」

「ハヤテくん、天王州さんの言うことはちゃんと聞かなきゃダメじゃない」

「僕にだって意志があります！」

「ところでキリカの行方は掴めましたか？」

「いいえ、まだなの。警察にお願いして国中を捜してもらってるけど何の手掛かりも無いわ」

桂さんは言い終えると、何かを思い出したかのように再び口を開いた。

「そう言えば一つだけ気になることがあるの」

「気になること、ですか？」

「ええ。葛葉理事長の自宅に見たこともない文字が書かれた本があったのよ」

見たこともない文字。その言葉でピンときた私は思い出した。

「デイジーさん、世界地図を持っていますか？」

「ちょっと待って下さい」

デイジーは世界地図を取り出すと広げた。

「それって例えばこのような文字とか？」

私は紙の左上に書かれた文字を差した。

「これよ！ 何て書いてあるかは分からないけど、これと同じ文字が本に書かれていたわ」

「それじゃあまさか、新たな魔王ってキリカのこと？ でも一体どうやってこの世界に？」

あの女がこの世界にどうやって入り込んだのかは分からない。だが一つの目的が見えてきた。

「私がこの世界でやることが大体分かりましたわ。これより魔王アテネ軍の目的を勇者一族と協力して魔王キリカを討伐するに変更致しますわ」

「ええ！？ 世界征服はどうするんですか！？ 私たちはアテネ様が世界を征服するって言い出したから旅を始めたんですよ！？ それに勇者の子孫への復讐だって！」

「そつと決まれば先を急ぎますわよ」

「ちよつと待って」

「何ですか？」

「一つ思い出したことがあるの」

「時間が無いから早く言いなさい」

「あのね、天王州さんはナギって知ってるわよね？」

「ええ、帝の孫ですわよね。それがどうかしたの？」

「実はそのナギが最近ハマってるゲームがあつて、そのゲームの名前が魔王アテネの逆襲〜勇者をぶっ倒せ！〜というタイトルなんですけど、物語が途中から新たに現れた魔王を討伐するに目的が変更されるの。しかも主人公が女の子で天王州さんと同じアテネって名前だったわ。それにハヤテっていう名の人間の男の子も最初からパーティーに加わっているのよ。因みに舞台となる世界はレコンギスタ。この世界と同じ名前ね」

「それではここはゲームの中なんですの？」

「その件に関してはこつちで詳しく調べておくわ。じゃあもう時間だから、何か遭ったらまた喚んでちょうだい。じゃあね」

そう言って桂さんは灰色のシルエットとなり消え去った。

私はカードアルバムからナギのカードを取り出した。喚んでみるか。

〔Summons butler Nagi〕

鳴り響くマシソヴォイス。バックルから灰色のシルエットが現れ、金髪ポニーテールの小さな女の子の姿になる。

「なっ、何が起こったのだ!? 私は部屋でゲームをしていた筈だぞ!?!」

「お嬢様!」

三千院 ナギというその女の子が振り返る。

「ハヤテじゃないか。……これはお前の仕業か?」

「いえ、私が喚んだのですわ」

ナギがこちらを見る。

「貴方はあの時帽子を拾ってくれた……」

「お嬢様、アータンとお会いしてたんですか?」

「ハヤテ、この美少女は誰なのだ?」

「僕が昔、一緒に暮らしてた幼馴染みの天王州 アテネさんですよ」

「何!? じゃああの一億五千万の金もこの人からか!?!」

「そうですよ」

「そうか。ところでここはどこなんだ?」

「レコンギスタという世界です」

「レコンギスタって私が今やってたゲームの舞台ではないか」

「ナギさん、貴方”とくぎ”コマンドの”しょうかん”で”ナギ”を選びませんでした?」

「何で知ってるんですか?」

「これで確定しましたわね。ここは」

3 ・伝説の盾エクスード（後書き）

はあ、お腹いっぱい。

あ、皆さん居たんのですの！？ それでは。

いよいよこの世界の謎について明かされてきました。そう、この世界は……と、これは次話のお楽しみですね。ではまたお会い致しますよう。

4・女盗賊ヒナギク（前書き）

アテネで御座います！

お魚くわえたどら猫 追っ掛けて

裸足で 駆けてく 愉快なアテネさん

買い物しようと町まで 出掛けたが

財布を 忘れて 陽気なアテネさん

って、何ですのこの長 川 町子！？ 私は猫さん追い掛けた
り財布忘れたりなんてしませんわよ！

それはそうと、<http://mypage.syosetu.com/2828/>のユーリさんからの指摘を受け確認してみたところ、私の苗字である「天王州」の「王」が「皇」になっておりまして、至急訂正を加えました。皆様には大変ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

くっ……この私が自分の姓を間違えるなんて不覚ですわ。

ところで、私の魔王軍に入隊して頂ける魔法の使える方はいらつしやらないのですか？ 人間でも魔物でも誰でも構いませんわ。入りたいという方がいらつしやれば、最終ページの下にある感想フォーム（携帯版は小説案内ページで電話機本体の「5」をクリック）から名乗りを上げて下さい。

4・女盗賊ヒナギク

「ところでここはどこなんだ？」

「レコンギスタという世界です」

「レコンギスタって私が今やってたゲームの舞台ではないか」

「ナギさん、貴方”とくぎ”コマンドの”しょうかん”で”ナギ”を選びませんでした？」

「何で知ってるんですか？」

「これで確定しましたわね。ここはゲームの中ですよ！」

「何だと!？」

驚き飛び退くナギ。

「しかしなぜ私がゲームの中に？」

「それは恐らく、このベルトが原因だと思えますわ」

「それはハヤテが持っているのと同じやつじゃないですか」

「似てるけど微妙に違いますのよ」

「大体分かりました。貴方はこのゲームの主人公で魔王アテネ。このフィールドを見渡す限りでは、コグレの村を出た直後で、これから勇者を捜して彼に協力し、魔王キリカを討伐しに行くところですね？」

「その通りですよ」

「ということはこの先のネリマーでアイツと戦うことになるのか」

「アイツ？」

「とても厄介な初ボスです。こちらが召喚した者を魔法で操るんですよ。お陰で何度もコグレに戻されて……仕方がないので村の周辺にいる魔物を召喚獣のヒナギクで倒してレベルアップさせて再戦しました」

「ちよつといいですか？ ナギさんは今どの辺りにいらっしゃるのです？」

「ネリマーの次のスギナーミです」

「ということとは、この世界と外の世界では時間の流れが少し違うと
いうことですね。分かりました。また何かありましたらお呼びし
ますので、その時も色々教えてください」

「この展開、もしかすると強制送還？」

ナギはそう言い残し、灰色のシルエツトとなり消失した。

「さあ、ネリマーへ行きますわよ」

「待って。今お嬢様が言ってたよね？ 厄介なボスが出るって」

「だから何ですか？」

「こつちには最強の剣士が居るけど、彼女が操られたらどうするの
？」

「大丈夫ですわ。桂さんなら操られる前に殺ってくれます。それに
ベルトの力で私には逆らえないんですのよ。というわけで行きまし
よう」

私たちはネリマーへ続く街道に行く。

やがて町らしきものが見えてきた。

「あれがネリマーですわね」

「ほんとだね。あそこだけ夕焼けで黒い煙が上がってるよ」

「いや、あれはどう見ても燃えてるのでは！？」

よく見ると町から火の手が上がっていた。

「二人とも、急ぎますわよ」

私たちは走った。

町に近づくに連れて町人の悲鳴が聞こえてくる。

「何あれ！？」

町内で暴れるトカゲ型の巨大な赤い怪物。その怪物が炎を吐き出
して一帯を火の海に変えていた。

「あれ役所のモブリストにあつたサラマンダーじゃありません！？」

「あれを倒せば大金が手にはいるよ」

私たちは町に入るとサラマンダーへ一直線に向かっていた。

サラマンダーが私たちに気付く。

「雑魚が何匹来ようと同じことだ！」

「雑魚はお前の方ですわ！」

サラマンダーが火炎弾を吐く。

私たちは散開して避け、戦闘準備に入った。

召喚用のカードを幾つか取り出す私。

ハヤテとデイジーがサラマンダーに打撃を与える。

やはり使える手駒はこれか。

〔Summons butler Hinagiku〕

出現した灰色のシルエットが体育着姿の桂さんになる。

「えっ、喚びだし!？」

「桂さん、あいつをやっつけて下さい」

「魔王様のご命令とあらば」

桂さんがサラマンダーへ向かっていく。私は透かさずカードを装填した。

〔Attack butler Bokutou masamu ne〕

正宗を掴み取り切りかかる桂さん。

サラマンダーは攻撃をかわすと呪文を唱えた。

「マリオネッター！」

桂さんが動きを止めた。

「どうしたんですかヒナギクさん!？」

サラマンダーがニヤリと笑うと同時に桂さんがハヤテに襲いかかった。

間一髪避けるハヤテ。

「何するんですか!？」

「死ね！」

桂さんが正宗でハヤテの首をはね飛ばした。
倒れるハヤテの体。

「ハヤテ ツ！」

「よくもハヤテ様を！」

デイジーが桂さんに突進する。

桂さんは迫り来るデイジーの腹に正宗を突き刺した。

「うがつ！」

血を吐くデイジー。

「ふんっ！」

桂さんは正宗を振るって発生した遠心力でデイジーを吹っ飛ばした。

地面に転がりピクリともしないデイジー。

桂さんがゆっくりとこちらへ近付いてくる。

「貴方一体どうなされたのですか!？」

「次はアテネ様の番ですね」

桂さんが私の上半身と下半身を切り離した。

「自分のシモベに殺される気分はどうお？」

「貴方まさか操られて!？」

「何のことです？」

桂さんが私の両腕を切断した。

「ぎゃああああ！」

「次はどこを斬って欲しい？」

ここで死ねばコグレの宿屋に戻るのだろうか。

「一思いに殺しなさい」

「喜んで地獄に落としてあげるわ」

桂さんが私の首に正宗を入れた刹那、私は全身汗だくの状態で宿屋の一室に移動していた。

「どうしたの？ アーたん」

ハヤテが心配そうに私を見据える。

「怖い夢を見ましたわ。桂さんが私たちを殺すんですの」

「ヒナギクさんが人を殺す訳ないよ」

「そうですね」

もしあれが現実なら、彼女はあの後どうなったのだろうか。そう思っ
て私は彼女のカードを取り出した。すると、彼女の絵は灰色のシル
エットとなっていた。

「ハヤテ、桂さんのカードはどうなってます？」

「ヒナギクさんの？」

ハヤテは懐からカードアルバムを取り出して中から桂さんのカードを抜いて確認した。

「……！？」

「どうしました？」

「消えてる……」

ハヤテのカードもまた灰色のシルエットとなっていた。

「これは一体どういうことなんだ！？」

立ち上がった私はベルトを装着してナギのカードを取り出してバツクルに差し込んだ。

☆ Summons butler Naggy

バツクルから飛び出した灰色のシルエットがナギになる。

ナギは辺りを見渡すと私たちの事情を理解した。

「やっぱり初ボスに負けたんですね」

「ええ」

「確か最初はヒナギクを召喚して挑んだんだが、マリオネッターで操られて仲間を全員殺されたんだっただな。しかもその直後に”メニュー”で”しょうかん”を確認したら”ヒナギク”は無かった」

「でも貴方、先ほど村の周辺の魔物を桂さんで倒して回ったと仰ったではありません？」

「こっちではアイツが喚ばれたのか。で、本題だが、この後サラマNDERに操られているヒナギクを取り戻しにいくんだ。じゃないと召喚コマンドにヒナギクの名前は表示されない」

「あの、お嬢様は何の話？」

「ハヤテは黙ってなさい。それで、桂さんを助けるにはどうしたらいいのです？」

「役所のモブリストを確認して下さい。そこに女盗賊ヒナギクの依頼があります」

「分かりましたわ。ハヤテ、デイジーさん、行きますわよ」

「む？」

ナギがデイジーを見やる。

「何だ。もう取り戻してるじゃないですか」

「いえ、確かに彼女もヒナギクですけど、似てるだけで別人ですわ」

「アテネ様、私はデイジーですよ」

「……こいつはバカなのか？ しかも今時悪魔のコスプレなんかして萌えとかあざとすぎじゃないか？ どうせやるならもっとひねりを……」

「バカとは何よ！？」

「バカではないか。デイジーは日本語でヒナギクなのだ」

「ムキー！ 何なのこのチビは！？」

「チビ言うな！」

「だったら言われないようにしなさい！」

「無茶言うな！ 私はまだ十四だこのペッターンコめ！」

「なっ、私の一番気にしていることを！ そう言う貴方だってペッターンコじゃない！」

「お前にだけは言われたくないわ！」

相性は最悪だった。

「ぶん殴るわよ！？」

「やれるもんならやってみろ！」

デイジーがナギに襲いかかった。

ナギは避けてカウンターを浴びせる。

「ぐっ！」

怯むデイジー。透かさずナギの蹴りで彼女は倒れた。

「餓鬼が！ お尻ペンペンしないと分からないようね！」

デイジーが真剣を取り出してナギに切り掛かった。

「ぐわっ！」

「お嬢様！」

「大丈夫だハヤテ。このぐらい……」

「でも血が」

「大丈夫だと言ってるだろう!？」

「そうですか？」

「お主め、なかなかやりおるな。だが……」

ナギは懐からゲームのワイヤレスコントローラーを取り出した。

「そんな物でどうしようっていうのよ？」

「ふっ……」

ナギはニヤリと笑うと、コントローラーのボタンを押した。

「うわっ!？ ちょっ、これは何ですの!？」

勝手に動こうとする体を必死で抑える私。

「ええい！ 私の指示通りに動かんか主人公め！」

「ナギさん、今すぐそのコントローラーを置きなさい！」

「嫌だようだ」

「私の命令が聞けないんですの!？」

「このゲームのナギは主人公の言うことは聞かぬのだ！」

「そんなのありですの!？」

「お嬢様、それを置いて下さい！」

「うっさいバカ！」

この場合はどうすればいい。私の前に三つの選択肢が現れた。

いうなりになる

いうなりになる

いうなりになる

何なんですのこの選択肢!？ この私が誰かの言うなりになるな

んて屈辱ですわ!

しかし選べるのはこれ以外にないので、私はナギに従うことにした。

「デイジーさん、歯を食いしばって下さいですわ!」

「え!？」

私は驚き戸惑うデイジーに攻撃を仕掛ける。

「ああん アテネ様にボコられるなんて感激です」

ナギに体を操られた私の連続攻撃にボロボロになりながらも幸せ

そんな顔をするデイジー。

「ようし、とどめだ！」

ナギの一声で私は漆黒の光弾をデイジーに放った。

「ぐっ！」

気絶して倒れるデイジー。

「私が魔法？」

「魔王なんだから持つて当然だろ」

「今のは何という技なんですか？」

「エネルギーブラックです」

「えねるぎいぶらつく、ですか」

「主人公が最初から覚えていた魔法です」

「他に何か無いんですの？ それと普通に話していただいで結構ですわ」

「そうか、ならそうするが。今のところあるのはエネルギーブラックだけだ。経験を積んでレベルが五になれば新しい魔法を覚えるがな」

「そうですか。貴重な情報を有り難う御座いました。ではまた何かありましたらその時にお呼び致します」

「ああ……」

ナギは灰色のシルエットとなり消え失せた。

私はデイジーの体を揺さぶった。

「デイジーさん、起きて下さる？」

「う……う……うん？」

デイジーが目を開けて起き上がった。

「アテネ様、もっと痛めつけて下さい」

「それはまた今度」

「そうですか……」

デイジーは肩を落とすとナギが居ないことに気付く。

「あの生意気な餓鬼はどこですか？」

「帰りましたわ。それとあの方を許してやっていただけますか？」

「どうしてですか！？ あんな手駒殺してやりましょう！」

「あの方は手駒ではありませんのよ」

「はい？」

疑問符を浮かべ首を傾げるデイジー。

「あの方はこの世界の神様ですわ。そうですねハヤテ？」

「え、ええ？」

「そうですね！？」

私はハヤテを睨め付けてやった。

「そ、そうなんですよ！ あの方はナギと言ってアーたんをお作りになった大魔王様ですよ！ アーたんはあの方の忠実なシモベではないんです！」

とても屈辱なことだったが、このゲームの主人公が私でそれを動かして話を進めるのが彼女なので仕方がない。逆らったら彼女に何をされるか、考えるだけで恐ろしいことだった。

「なんと大魔王様ですか！」

「ですから決して”生意気な餓鬼”とか言うてはいけませんよ」

「分かりました。でもいいんですか？ 私たちの目的を勝手に変えて」

「勝手に変えたのではありませんわ。勇者と協力して魔王キリカを倒すのは大魔王ナギ様のご命令なんですの」

「ご命令とあらば仕方ありません。早速出発しましょう」

「ええ」

私たちは宿屋を後にすると、役所の窓口で”女盗賊ヒナギク”の依頼を受けた。

「さあ、桂さんを捜しに行きますわよ」

私たちは役所を出ると、闇市場の売人の下を訪ねた。

「あ、アテネ様！？」

いきなりの登場に驚き戸惑う売人。そしてダークエクシードに気付く。

「そ、その黒ずんでる盾はまさかエクシード！？」

「ええ、その通りですけど」

「それは自分が持っていた筈！」

「売人は自分の所持品を確認する。だが。」

「無い！ さっきまであったのに何で無くなってるんだ！？」

「うふふ、どうしてでしょうね？」

「まあいいや。元々それはアテネ様に差し上げるつもりでしたし。それでは」

「売人は咳払いをして仕事を始める。」

「いらっしやいませ。ここは防具屋で御座います。何をお求めですか？」

「いえ、今日は装備を買いに来たのでは無いんですの」

「へ？」

「女盗賊ヒナギクについて、貴方なら何か情報をお持ちでは無いかと思つて参つたのです」

「そうですね。その情報は少し値が張りますぜ？」

「おいくらですよ！？」

「五千ギルガメツシュで御座います」

「ハヤテ」

「ハヤテが所持金を確認する。」

「十二ギルガメツシュしかないよ」

「それでは教えられませんな」

「安く出来ませんか？」

「それは出来ない相談ですよ、お客さん」

「私はお店の台を思いつ切り蹴りつけた。ジンジンと痺れる足。」

「仕方ありません。銀行はどちらですか？」

「銀行なら魔王城方面の入り口付近にあります」

「二人とも参りますわよ！」

「私は銀行を目指して歩き出した。」

「待つてよアーたん。もしかして銀行強盗でもするつもり？」

「五千ギルガメツシュを手に入れるにはそれしか方法がありません」

わ。それに、もしかすると私たちの悪行が桂さんの耳に入って再会出来るかも知れませんか」

「成る程！」

闇市場を出た私たちは、村の入り口付近にあるギルガメッシュ銀行へとやってきた。

「きゃああああ！ 魔王だわ！」

従業員やお客さんたちが悲鳴を上げて怯える。

私は窓口に向かいこう言った。

「今すぐ五千ギルガメッシュを用意しなさい！ さもなくばこの魔王軍がここを占拠致しますわ！」

すると従業員は魔法を唱えた。

「エマーゼンシー！」

それから少しして岡っ引きたちがやってきた。

「無駄ですわよ。彼らは私の忠実なシモベ」

しかし願い叶わず、私たちは御用となって豚箱へ放り込まれてしまった。彼らの話を聞くと、村に住む霊媒師が彼らから魔物を引き張り出して浄化させたんだそうなの。

「いいか、二度と脱獄なんかするんじゃないぞ！」

看守が私たちに怒号を上げた。

「あの、私たちはこれからどうなるのでしょうか？」

「お前たちには死刑が決定されている。何たって魔王だからな」

ここで死ぬようならゲームは進まない。私は桂さんが助けに来てくれると信じてその日を待つことにした。

それから数日が経過し、チャンス好機は訪れた。

何者かの襲撃を受けた牢獄の見張りが全員悲鳴を上げて倒れていったのだ。そしてその何者かが私たちが閉じ込められている牢屋の前で立ち止まり扉を開放した。

「みんな、助けに来たわよ！」

そこに現れたのは、案の定桂さんだった。

私たちは桂さんと共に脱獄を試みた。

「脱獄だ　っ！」

私たちの前に岡っ引きたちが立ちふさがった。

「さあて、一暴れするわよ！」

桂さんが正宗を手に単身敵に挑む。

彼女の活躍で岡っ引きたちは呆気なく倒れ、彼女が手に入れた経験値が私たちに振り分けられてレベルが上がった。

「貴方のお陰で助かりましたわ。有り難う御座います」

「お礼なんていいわ。私は貴方の忠実なシモベ。助けるのが当然じゃない」

「でも貴方、サラマンダーに操られていた筈では？」

「何の話？」

成る程。そういう設定か。

「いえ、何でもありませんわ。ところで、どうして私たちが捕まったことを？」

「それは話すと長くなるんだけど、私が外の世界でこのゲームについて調べていたら、いきなり吸い込まれちゃって。それで貴方たちを捜してただけど、見つからないから悪行でも働けば何か情報が入るかなと思って盗賊を始めたの。そしたら村の住民が貴方たちのことを話しているのを耳にして助けにきたって訳」

桂さんは一通り説明し終わると、懐から袋を取り出した。

「それは何ですか？」

「貴方たち、銀行強盗を働いて捕まったんですってね」

「もしかしてその中に五千ギルガメッシュが？」

「どうかしら？」

渡された袋の中を確認すると、十倍の金額が入っていた。

「まさか銀行強盗を？」

「ええ、そうよ。お陰で賞金が跳ね上がったわ」

「そうですか。それで、このゲームについて何か分かりましたか？」

「ええ。鷺ノ宮さんに相談して分かったことなんだけど、どうやらこのゲームには呪いがかかけられているらしいの」

「そんな非現実的なこと」

「呪いは実際にあるのよ。以前、私は呪いをかけられてロバの耳が生えちゃったし」

「そうですか」

私は思い出した。カードはどうなったのだろう。

「ハヤテ、カードはどうなってます?」

ハヤテが桂さんのカードを確かめる。

「まだシルエットのままだよ」

「何そのカード?」

桂さんがハヤテからカードを引ったくる。

「ちよつと、返して下さいよ!」

「五月蠅いわね! 天王州さん、このカードは何?」

「それはハヤテが貴方に変身するカードなんですけど、どういっわけか色を失ってて」

「変身?」

「因に私の場合は召喚ですわ」

「だから私はあの変な空間に引きずり込まれたのね」

「それは兎も角、早いところ移動しましょう。ここに居たら彼らが起きてしまいますわ」

「そうね」

桂さんがハヤテにカードを返したのを確認すると、私たちはその場を後にした。

4・女盗賊ヒナギク（後書き）

作者ID「w4034a(3617)」の桂 ヒナギクから一言。
ちよつと分かりにくいですが、前書きで天王州さんからあったように、この物語上で他作品のキャラクターの介入を募集致します。出演させて頂きたい方は感想フォーム及びメッセージボックスから入力データをご送信下さい。尚、出演希望者の方には当作品から作者マ イページと出演なさっている作品へリンクを貼らせて頂きます。
以上、魔王アテネ軍切り込み隊長桂 ヒナギクからでした。

5・だぶるひなぎくとアテネ様の報復（前書き）

こんにちは、切り込み隊長のヒナギクよ。今回からパーティー入りしたのでよろしくね。

えっ？今日はアテネ様じゃないのだった？

ごめんなさい。今回は私が任されてるの。

何で「アテネ様」と呼ぶのだった？

それはほら、私アテネ様の忠実なシモベじゃない。だからよ。……
何よその目？

えっ？もう始まる！？

5 ・だぶるひなぎくとアテネ様の報復

コグレを再出発し、辺りで魔物と戦ってレベルを上げつつネリマ
ーへ向かっている私たち。

ちょうどコグレとネリマーとの中間地点にやってきた時のこと。

「天王州さん、今度からは”アテネ”でいいかしら？」

桂さんが唐突にそう訊ねてきた。

「いいですよ」

「ホントに？　じゃあアテネも私のこと”ヒナギク”って呼んでく
れる？」

「分かりましたわ、ヒナギクさん」

「有り難う。ところでその左手に持つてるの、鷲ノ宮さんの家にあ
るエクシードにそっくりじゃない？」

「そうなんですの？　私は知りませんわ」

「そうなのよ。ちょっと見せて？」

私はヒナギクさんにダークエクシードを渡した。

ダークエクシードから出た漆黒のオーラがヒナギクさんを包み込
む。ヒナギクさんは苦しそうな表情で膝を着いた。

「物凄い邪気ね。飲み込まれそうだわ。こんなものを平気で装備で
きるなんて流石はアテネ様ね」

飲み込まれかけていた。

「それ元々はエクシードという名で黄金に輝いていたんですの。と
ころが私が触った瞬間にその色に」

「じゃあこの悪しき力はアテネ様の物かしら？」

「もういいかしら？」

私はヒナギクさんからダークエクシードを受け取った。それと同
時に彼女を包んでいた漆黒のオーラがその体内に入り込んだ。

「うっ……！」

「どうしたんですの？」

「大丈夫ですかヒナギクさん？」

私たちがヒナギクさんを心配そうに見据えていると、彼女の姿が悪魔になり果てた。そしてヒナギクさんとデイジーが光に包まれる。「ちよっ、何ですか一体!？」
驚き戸惑うデイジーの体にヒナギクさんが入り込んで光が治まった。

「えっ!？」

自分の体を改めるデイジー。いや、ヒナギクさんだろうか。

「貴方、自分の名前を言っでご覧なさい」

「私はヒナギクだけど。ていうかこれは何？ デイジーと合体しちやっただわよ?」

「デイジーさんはどうなったんですの?」

「デイジーは消えたみたいね」

「一体どういことですか?」

「そんなこと分からないわよ。兎に角、先を急ぎましょう?」

「そうですね」

私たちは先を目指す。

やがてネリマーの町が目前に見えてきた。

「何か様子が可笑しいですわ」

私たちが急いで町へ入ってみると、町全体が焼き払われていた。

「まさかサラムンダーが!？」

私たちは壊滅した町を探索した。

「あれは何かしら!？」

ヒナギクさんが町の南側の出口に光る何かを見つけたので、私たちは足早に駆けつけた。

「これ私の髪留めよ」

ヒナギクさんが金の髪留めを拾う。

「でもどうして? 私はしてるわよ」

「ひよっとしたらもう一人別のヒナギクさんが居るんじゃないでしょう?」

「私ともう一人？」

あの夢の中での出来事が本当ならば、彼女がどこかに居る筈だ。

「召喚獣ヒナギク……」

私はヒナギクさんのカードを見つめながら呟いた。

「取り敢えず召喚獣の方を捜しましょう」

私はヒナギクさんカードを仕舞うと、代わりにナギのカードを取り出した。

「何の手掛かりも無いまま捜しても仕方がないのでナギさんに情報を提供してもらいましょう」

私はベルトを装着してカードをバックルに差し込んだ。

☆ Summons butler Nagi ♪

バックルから灰色のシルエツトが現れてナギになる。

「うむ、どうやら合体イベントを発生させたみたいだな」

「ナギさん、この後はどうすればいいのですか？」

「取り敢えずこのまま先へ進んでくれ。するとスギナーミのちよつと手前にサラマンダーの洞窟があるんだ。そこにサラマンダーの手下になったヒナギクが居る」

「成る程。それを倒せば帰ってきてくれるのですね？」

「いや、戦うんじゃない。今ここで何か拾わなかったか？」

「この髪留めを拾ったわ」

「ヒナギクと戦闘になったら”どうぐ”コマンドからそれを選択して使え。そうすれば全て思い出してマリオネッターが解ける。するとヒナギクは狂戦士状態バサカになれるんだ。そしてサラマンダーに挑め」

「最早歩く攻略本ですわね」

「召喚で出せるナギは攻略本にしかないぞ。バトル中に出しても即殺されるだけで使い物にならない。じゃあ私は帰るぞ」

ナギはそう言って灰色のシルエツトとなり消え去った。

「そうと決まれば洞窟へ行きますわよ」

私たちはスギナーミ方面に向かった。

途中で何匹かの魔物に襲われたが、無事にやり過ごし洞窟の前に

辿り着いた。

「さあ、入りますわよ」

私たちが洞窟に入ろうとしたその時、背後に何者かの気配を感じた。

「誰ですの!？」

振り返った先には体育着姿の桂さんが立っていた。

「誰かと思えば元ご主人様じゃない。サラマンダー様に何の用？」

「ぶっ殺しに来たのですわ。けどその様子じゃ行かせてくれなさそうですわね」

「ええ、当然」

桂さんが正宗を喚ぶ。

「サラマンダー様には蟻一匹近付けさせないわ! 無論、貴方たちもね!」

桂さんがいきなり襲いかかってきた。

「危ないですわね!」

間一髪のところ回避した私は所持品の中から金の髪留めを取り出した。

「それがどうしたって言うのよ?」

道具が効かない!?

私は金の髪留めを桂さんに見せつける。

「何がしたいのか分からないわ!」

桂さんが攻撃を仕掛けてくる。

「アーたん!」

ハヤテが私を突き飛ばして身代わりになり攻撃を受けた。

「ぐわっ!」

ハヤテの体から血飛沫が上がる。

「ヒナギクさん、僕は貴方が好きです!」

ハヤテの思い掛けない言葉にヒナギクさんと桂さんが頬を赤らめた。

「「えっ?」」

「僕は本気です！」

「ちよつとハヤテ!? 貴方何言っちゃってんですの!?!」

「ハヤテくん? えっ?」

戸惑う桂さん。

「ヒナギクさん、武器を仕舞って下さい」

「う、うん……」

桂さんが正宗を仕舞った。

「ヒナギクさん、僕たちの下へ戻ってきていただけませんか?」

「で、でもそんなことしたらサラマンダー様を裏切ることになって

……」

桂さんは顎に手を当てて考え込んだ。

「じゃあこうしましょう。貴方たちがサラマンダー様の下につく」

このままでは色々と拙い気がする。私は桂さんに駆け寄って金の髪留めをその頭に付けた。

「うっ!」

桂さんが頭を押さえた。

「サラマンダー様……!!」

そういい残して倒れる桂さん。

「ヒナギクさん、しつかり!」

ハヤテが桂さんの体を揺さぶると彼女は目を開けた。

「ハヤテくん?」

起き上がって辺りを見渡す桂さん。

「ここどこ? っていうか私、今まで何してたの?」

私は桂さんに彼女がサラマンダーに操られて私たちを殺したことを話した。

「赦せない……!! この私を操ってみんなを殺させたなんて! 私もう怒ったわ!」

その時、私の懐から二枚のカードが飛び出した。

私はその二枚を掴み取る。一枚は桂さんの召喚カード。もう一枚は彼女のパワーアップカードだった。

「ハヤテ、絵が戻ってますわ！ それに新しいカードまで！」
ハヤテが桂さんのカードを取り出して確認する。

「こつちも絵が戻ってる！ おまけに新しいカードまで！」

「皆さん、サラマンダーに復讐ですわよ！」

私たちは洞窟へと侵入すると奥で眠るサラマンダーの下へやってきた。

「起きろサラマンダー！」

私の怒号にサラマンダーが目を覚ました。

「お前たちはさっき殺した筈だが？」

「私たち魔王軍は何度でも蘇れるのですよ！」

「魔王軍だと!？」

驚き戸惑うサラマンダー。

「魔王アテネ軍はこれよりお前をぶつ殺す！」

「アテネ？ 百年前に勇者の手によってランタンに封印された魔王か。ふつ、風の噂によるとお前たちはキリカ様を討伐するために旅をしているそうだな。だがそれも今日で終わりだ っ！」

サラマンダーがいきなり攻撃を仕掛けてきた。

散開しながら避ける私たち。

「よくも私を操ってくれたわね！」

桂さんが正宗を手にはサラマンダーへ突進した。

「マリオネッター！」

魔法にかかった桂さんが攻撃対象を私に変更した。

「そんなもの打ち消してみせますわ！」

私は予め装着していたベルトのバックルに桂さんのパワーアップカードを差し込んだ。

「Attack butler Baresark」

鳴り響くマシントウイスと共に突進してきた桂さんが私の寸前で立ち止まった。

「桂さん、サラマンダーにダイレクトアタックですわ！」

桂さんはサラマンダーへ向き直ってそのまま突進する。

「お前たちも続け　っ！」

その言葉に私たちは一斉にサラマンダーへ迫った。

「マリオネッター！」

だが桂さんは魔法を受け付けずにサラマンダーに攻撃をした。それに続いて私たちもアタックする。

「ぐわああああ！」

サラマンダーは悲鳴を上げる。

「とどめですわ！」

Final attack butler Hi Hi Hi

Hinagiku}

桂さんが正宗を振るって衝撃波を飛ばしてサラマンダーを真つ二つにした。

「流石は魔王アテネ……！　その力は百年経っても衰えておらぬか

……！」

サラマンダーはそう言い残してその命を絶った。

こうして見事にサラマンダーの首を討ち取った私たちは洞窟を出た。

「みんな、助けに来てくれて有り難う」

「いえ、礼なんていいですよ」

「そうですわ」

「どうでもいいけど、何で私が二人居るの？」

「へ？」

ヒナギクさんの言葉に桂さんが疑問符を浮かべた。

私は桂さんに”女盗賊ヒナギク”のことを話した。

「そうなんだ。じゃあ私が二人になったことは鷲ノ宮さんに訊いてみるわね」

「お願いしますわ」

「じゃあね」

桂さんは灰色のシルエットとなり外界へ送還された。

「何にしてもこれで一件落着ね」

「そうですね」

「さあ、スギナーミに行きますわよ」

私たちはスギナーミという大都市に向けて歩き出した。

「ところでハヤテ、あれは本当なんですか？」

「え、何が？」

「ですから、彼女に言った言葉」

「うん、本当だよ」

「ハヤテくん、私なんかでいいの？」

「はい」

「何が”はい”ですか！？ 貴方ミノノスで私に告白したばかりじゃないですか！」

「怒らない怒らない。僕はヒナギクさんとアーたんの二人が好きなんだ」

「何ですかそれ？」

「二股かけるつもり？」

「いけませんか？」

「最低！」

私たちはハヤテをぶん殴った。

「あつっ！」

気を失い倒れるハヤテ。

仕方なく私はハヤテを引きずっていくのだった。

5 ・だぶるひなぎくとアテネ様の報復（後書き）

遅れてごめんなさいですわ！

えっ？ ヒナギクさんが前書きを担当した？

ちよつとヒナギクさん！？

ヒナギク「呼んだ？」

あなた何勝手に出てるんですの！？

ヒナギク「だってアテネ様が来ないんだもん」

あそこは私の部屋ですわ！ 勝手に入るんじゃないやありません！

ヒナギク「ごめんなさい……」

ところでハヤテはどこですの？

ヒナギク「ハヤテくんならナギに頼まれて家賃収入用の家を探しに行ってるけど」

あの野郎、勝手に出て行きやがって！ 帰ってきたら承知しませんからね！

ヒナギク（アテネ様が怒ってる……）

6 ・再会の魔王（前書き）

旅の途中で立ち寄った大都市。その市長さんがお待ちだと聞いた
私たちはその人物と会うことに……

6・再会の魔王

大都市スギナーミ。人口約一万人が住むこの都市では魔法の売り買いがされている。そんな都市に私たちはやってきた。

「何だか東京みたい」

「名前も何か杉並に似てますよね」

「このゲームの作者が町の名前を考えるのが面倒くさかったんだろ
ていうか何でそんなに不機嫌なのアーたん？」

それは当然だ。ここに辿り着くまでに数多の魔物と出会い頭に戦ってきた。しかし戦ったのは私一人だけ。手下の二人はラブラブモード展開で何もしない。お陰で私のヒットポイントは残り三。そりや不機嫌にもなるわ。

「お前たちのせいだろうが！」

私は怒号を上げる。

「何怒ってんの？」

「そうよ。怒ったら血管切れるわよ？」

私は二人に向きを変えると、右の手の平を前に差し出した。

「何？」

「何よ？」

「お前らなんか燃えてしまえ！」

ハヤテとヒナギクさんが燃え上がり、真っ黒焦げになった。頭はアフロだ。

「僕たち何かした？」

「人が魔物と必死で戦ってるって時に何後ろでラブコメってんですの！？ そんなことしてる暇があったらちゃんと私をサポートしなさい！」

二人はしょんぼりとした表情で「ごめんなさい」と言った。

「分かればいいですわ。というわけでヒナギクさん、私たちはここで待っていますので宿屋を探ってきて下さい」

「何で私が!？」

「シモベなんだから当然でしょ」

「はいはい、分かった。探してくるわよ」

ヒナギクさんはハヤテを寂しそうな顔で見るとパーティから外れた。

「これで邪魔者は居なくなりましたわね」

「アーたん？」

「ハヤテ、ハグハグ」

ハヤテは疑問符を浮かべた。彼はきつところ思っているだろう。はぐはぐ？

「ぎゅう　って」

「アーたん、何か変だよ？」

何も分かってないバカが目の前に一人。

「もういいですわ」

放つところ。

「魔物だ　っ！　魔物が出たぞ　っ！」

驚いた私が声のした方を振り返ると、岡っ引きに追われてるヒナギクさん。

そう、今のヒナギクさんは魔物の姿。追われないわけがない。

「ハヤテ！」

私たちは急いで駆けつけた。

ヒナギクさんを後ろに隠して岡っ引きたちの前に立ちはだかる。

「何だお前たちは!？」

「我々は魔王軍だ！」

「魔王軍!？　魔王キリカか!？」

「違う！　アテネ様だ！」

岡っ引きたちは一点に集まって小さな声で相談事を始めた。そして年長者が言った。

「これはこれは。お待ちしておりました、アテネ様」

岡っ引きたちは全員ひざまずいた。目の前の光景に私たちは疑問

符を浮かべる。

「……………はい？」

「アテネ様をメイヤー・スカーレットがお待ちです」

「はあ……………」

私たちは岡っ引きに連れられ、都市の中央に聳える建物内部へとやってきた。魔力式エレベーターで最上階に上り、メイヤーの待つ部屋へと案内される。

「天王州 アテネ、よくぞ参った」

部屋の奥に机を隔てて椅子に座ってる私に瓜二つの少女。

「アーたんそっくり！」

「そういうお前はゲールにそっくりではないか」

「貴方は一体誰なんですか？」

「知りたいか。ならば教えてやろう。私は百年前に世界を闇で覆った魔王のアテネ・スカーレットだ」

「何ですって!?!」

「本物の魔王!?!」

「けど魔王アテネは百年前に勇者によってランタンに封印された筈!?!」

「ああ、確かに私は封印された。だが彼が私の封印を解いてくれたのだよ」

「彼?」

スカーレットの横にヒナギクさんと同じ格好をした水色短髪の少年が現れた。

「僕にそっくり……………」

「紹介しよう。夫のゲールだ」

「初めまして、ゲールです」

ゲールが会釈をする。私たちも釣られて軽く頭を下げた。

「天王州 アテネ、こっちへ来い」

私はスカーレットに近付いた。

「だいぶ傷ついているな」

スカーレットが瞑想をすると、私の体力が完全回復した。

「あの、スカーレットさん」

「何だ？」

「貴方はどうして私の姓をご存知なんですか？」

「それは私とお前が元々は一つの存在だったからだ」

「へ？」

「百年前、ランタンに封印された時、私の精神は外の世界へ飛ばされた。精神だけとなった私はそこで天王州 アテネとして生を受けた。それがお前だ」

「えっと、何が何だかよく分からないのですが」

「分からなくていい。そして封印された私自身は長い年月を経てゲールによって助け出されたのだ。以来、私はこの大都市を乗っ取ってメイヤーをやっている」

「それで、私に一体何の御用なんですか？」

「お前を私の体に戻したいのだ。お前をこの世界に連れてきたのはそれが理由だ」

「貴方が私を現実世界からゲームの世界に誘った張本人！？」

「それでどうだ？ 私の所へ戻ってきてはくれぬか？」

「一つに戻って貴方は何をするおつもりですか？」

「いい質問だ。最近この世界に現れた魔王キリカ。私はお前と一つに戻ってそいつを倒そうと思う」

「どうして魔王が同じ魔王を？」

「この世に魔王は二人も要らぬ。それに奴は外の世界から来たというではないか」

「キリカはこの世界に居てはならぬ存在、ということですかね？」

「そう言うことだ。だから今すぐに私の中へ戻ってきてくれないか？」

「仮に一つに戻ったとしましょう。その後、私の意識はどうなるのです？」

「消えるんじゃないかと思うと怖いかな？」

「ええ……」

「案ずるな。どちらの意識も消えない」

「……少し時間を頂けないでしょうか。決心が付きませので」

「分かった。いい返事を期待しているぞ」

「私はスカーレットの顔を離れた。」

「ああ、一つよろしいですか？」

「何だ？」

「宿屋つてどこにありますか？」

「そう思ってたんと部屋は用意してある。ゲール、案内してやれ」

「はい！」

「ゲールが私たちの下へやってくる。」

「こちらです」

「私たちはゲールにスカーレットの用意した寝室へと案内される。」

「凄い部屋だね」

「丸で高級ホテルの一室のようだ。」

「何かありましたらスカーレット様の下へおいで下さい」

「ゲールは去っていった。」

「ねえ、ハヤテ」

「うん？」

「あのアテネ、信じて大丈夫でしょうか？」

「大丈夫じゃないかな。何で？」

「あの人と合体して、もし私の意識が失く^なってしまったら……」

「大丈夫だよ、アーたんなら」

「その自信はどこから？」

「兎に角、そんなに心配しないで。僕はアーたんがあの人と合体してもアーたんのままだと信じてるから」

「ハヤテ……」

「ハヤテの言う通り心配する必要はないかも知れない。」

「ハヤテ、あの人の下へ行ってきましたわ」

「行ってらっしゃい」

私はスカーレットの下へ向かった。

「スカーレットさん！」

「今度は何だ？」

「私、貴方の中に戻りますわ」

「おお！ そうか、その気になってくれたか！」

「それで、どうすれば元に戻れるんですの？」

スカーレットが立ち上がりこちらへ回ってきた。

「念じる」

私が心中で一つに戻りたいと強く願うと、二人の体が光に包まれた。

「あ、ちよつと待って」

消える光。

「どうした？」

「もし、もしもですよ。もしも私の意識が消えるようなことがあれば、ハヤテのことお願いしてもよろしいですか？」

「それはあのゲールに似た少年のことか？」

「はい！」

「ひよつとして好きなのか？」

真っ赤に染まった私の顔から湯気が出る。

「な、何を仰るんですか！？ あんな男……何とも思ってますんわ

……」

「ふふ……」

笑うスカーレット。

「何ですか？」

「いや、可愛いと思ってな」

「なっ……!!」

「仮に消えたとしても、ハヤテのことは私に任せておけ。死ぬまで面倒を見てやる」

「スカーレットさん……」

「さて、仕切り直しだ」

「はい！」

私とスカーレットが光に包まれる。

「な、何だか緊張しますわ」

私の体がスカーレットへゆっくりと引き寄せられ、彼女に重なり始めた。

頭の中に入り込んでくるスカーレットの記憶。彼女の闇が光で照らされた私の心を侵食する。そして、私とスカーレットは完全に一つとなった。

「アーたん！」

そこにハヤテが飛び込んでくる。

「あれ、アーたんは？　もしかしてもう？」

「何か御用ですか？」

「アーたんなんだね」

「ええ、そうですけど。それで、何ですの一体？」

「実は大変なことが起きたんだ！」

「大変なこと？」

「都市が葛葉理事長の放った魔物に襲われてるんだ！」

「何ですって！？」

慌てて窓へ駆け寄って外を見ると、無数の魔物たちが空から地上へ魔法による攻撃を行っていた。

放たれる爆弾のような炎。

地面に突き刺さる光の矢の雨。

「ゲールさんはいらっしやる！？」

背後にゲールが現れた。

「お呼びでしょうか？」

「この都市の守りはどうなってますの！？　このままでは住民が！」

「ご安心下さい。この建物にはバリアが張られています。どんな攻撃も受け付けません」

「人間たちはどうなるの！？」

「あんなゴミ屑同然の奴らはどうなっても知らんと仰ったのはアテ

「本様ではありませんか」

「スカートはそんな風に！」

「私は駆け出した。」

「ハヤテ、貴方はヒナギクさんと一緒に住民の避難をお願いします！
私は外から大量の兵を呼び集めますわ！」

「部屋を飛び出し、エレベーターで地上へ降り、キリカ一味の下へ
駆けていく。」

「こいつら全員召喚ですわ！」

「私は有りつ丈のカードを装着したバツクルに差し込む。」

「Summons butler Hinagiku Isumi
Maria Makina Ginka Kyounosuke
Yukiji Sakuya Risa Miki Izumi
i」

「私の前に大勢のシモベが出現。桂さんと伊澄以外は何が起こった
のか理解出来ずにいた。」

「貴方たち、迎え撃つのですわ！」

「私がシモベたちにレベテーションの魔法をかけると、桂さんを残
した全員が魔物の軍勢に向かっていく。」

「どうして行かないのです？」

「あ、あんなところ行ける訳ないじゃない！」

「もしかして怖いのか？」

「ばっ、怖くなんか！」

「じゃあ行つて下さいますわね？」

「天王州さんが言うんじゃ仕方ないわね！」

「桂さんは飛び立った。」

「皆、頑張つて。」

「私は心中で彼女たちを応援しながら、ハヤテたちと合流した。」

「住民はどうなってますの！？」

「もう殆どが避難を終えてるよ。そっちは？」

「有りつ丈の手下を召喚しましたわ」

「ピギヤー！」

突然、魔物が襲いかかってきた。

「きゃあ！？」

私は攻撃を受けて吹っ飛んだ。

「ぐあっ！」

地面に叩き付けられる。

「アーたん！」

私は立ち上がり様に魔物を睨め付けた。その翼の生えた赤色の大きなカエル、元いデビルフロッグレットがたじろいだ。

「カエルって翼ありましたっけ？」

「いや、カエルに翼は……うわっ！」

ハヤテがカエルの吐いた水の弾で吹っ飛ばされた。

「貴様！」

私は背中に背負った鞘から剣を抜いてカエルに切り掛かった。

カエルがひらりとかわし、剣の先が地面に突き刺さった。

私は力強く引っ張るが、これがなかなか抜けない。

「アーたん後ろ！」

「え？」

振り返ると、カエルが強力な水鉄砲を放ってきた。

「きゃあ！」

勢い良く吹っ飛んで地面に転がる私。

「はああああ！」

ヒナギクさんが正宗でデビルフロッグレットに襲いかかる。だが既のところから上空から火炎弾が飛来してヒナギクさんを吹っ飛ばした。

「きゃああああ！」

地面に叩き付けられたヒナギクさんの前に、二本足で立つ翼の生えたオレンジ色の等身大のトカゲ ファイアリザード が降り立った。

「リザードン来たっ！」

「驚いてる場合ではありませんわよヒナギクさん」

「そうね」

立ち上がるヒナギクさん。ファイアリザードへ突進する。

「ぎゃうっ!」

ファイアリザードが後ろを向くと同時に尻尾でヒナギクさんを薙ぎ払った。

「アーたん、そのリード仲間に来れないかな」

「へ?」

「だってそいつ強そうだよ」

「試みてみますわ」

私はファイアリザードへ接近しようとした。だがデビルフロッグレッドがそれを邪魔をする。

「貴方に構ってる暇などありませんわ!」

私は目の前のデビルフロッグレッドに回し蹴りを浴びせた。

遠くへ吹っ飛んでいくデビルフロッグレッド。私は改めてファイアリザードへ突進すると、その頭を鷲掴みにした。

「私にかしずけ、マインドコントロール!」

するとファイアリザードはその場に膝を着いた。

「成功ですわハヤテ!」

「凄いなアーたん! どうやったの!?!」

「スカーレットさんの魔法を使っただけですわ」

その時、私の召喚したシモベたちが全ての魔物を倒し終えてやってきた。

「全部片付いたぞ」

「ご苦労様ですわ」

召喚獣たちはシルエツトとなって消え去った。

「ピギヤー!」

デビルフロッグレッドが戻ってきて私に攻撃を仕掛けようとした。だが、ファイアリザードがその前に立ちはだかつて火炎弾を放った。

「ゲロツ!?!」

デビルフロツグレットドは燃え尽きて消滅した。

「よくやったわ、リザード」

ファイアリザードは咆哮した。

私は横たわっているヒナギクさんに歩み寄る。

「ヒナギクさん、立てますか？」

手を差し出す。ヒナギクさんはそれを掴んで立ち上がった。その

時の彼女の頬はなぜか赤みがかっていた。

「あ……ありがとう……」

「ヒナギクさん、貴方もしかして私にときめいて？」

「……！？」

驚愕の表情を作るヒナギクさん。凶星だったみたいだ。

「貴方、ハヤテはいいんですの？」

「いいわけではないでしょ」

「私のことは？」

ヒナギクさんは顎に手をあてがって考え込む。そして口を開いた。

「ハヤテくんもアテネ様も欲しいわ」

「ヒナギクさん……」

「アテネ様」

ヒナギクさんはが私を抱き締めた。

「え？」

徐に近付いてくるヒナギクさんの唇。

「ちよつとヒナギクさん！？」

私は抵抗する間もなくヒナギクさんに唇を奪われた。

「ちよつと何やってんですかヒナギクさん！？」

私の背後でハヤテが突っ込み、唇を離れたヒナギクさんが言った。

「何って、アテネ様に対する私の気持ちを行動で表したつもりだけ

ど」

「アーたん、君はそれでいいの？」

「ヒナギクさんは私の嫁ですわ」

その言葉にハヤテは顎が落っこちた。

6・再会の魔王（後書き）

とうとうアテネ様も合体しちゃったわね。

どうも、ヒナギクよ。

何だろう？　最近、アテネ様を見るとドキがムネムネするのよね。
まさか私、アテネ様に恋を？

7・廃村

私たちはスギナーミを離れ、次の町へ向けて歩いていった。

「ねえ、アーたん」

と、ハヤテ。

「何かしら？」

「次はどこへ行くの？」

私は懐からスギナーミの役所で頂いた世界地図を取り出した。

「ここからだとマーネリ村ね。取り敢えずそこへ向かうとしますか」

私は地図をしまった。

その瞬間、魔物が現れて私を襲った。

「ぎゃあ!？」

吹っ飛ばされ、地面に叩き付けられる。

「この……よくもやってくれましたわね！」

私は火炎弾を放ち、魔物を消滅させた。

グー、とヒナギクさんのお腹が鳴る。

「お腹空いたわ」

続いてハヤテのお腹。

「僕もお腹空いたよ、アーたん」

「じゃあここらでご飯にでもしましょうか」

「でも調理器具がないわよ？」

「それなら僕にお任せ下さい」

ハヤテがテーブルを用意し、その上にガスコンロ。そして食材を出した。

「ハヤテ、何でそんなもの持ってるのよ？」

「それは執事だからだよ」

「執事はいつもそんなものを持ち歩いてるの？」

「ハヤテくんが特別なだけじゃない？」

「何でもいいわ。取り敢えず何か作ってちょうだい」

ハヤテは黙々と料理を始めた。

そして出来上がったのはシチューだった。

「美味しそうね」

「頂きましょう?」

「うん」

私たちはシチューを食べた。

結構美味しかった。

「ごちそうさま」

私たちが食べ終わると、ハヤテが食器を片付ける。

「それじゃあ出発しましょう」

私たちはマーネリ村へ向けて歩き出した。

*

マーネリ村に到着した私たち。

村は閑散としており、人っ子一人いなかった。

「皆どこに居るのかしら……」

「廃村なんじゃない?」

私たちは村を片っ端から調べた。しかし、誰もいない。

「廃村ね」

私は地図を取り出して眺めた。

マーネリ村から近いのは、シーンジュークだ。

「南下しましょう」

私たちはマーネリ村を後にしてシーンジュークを目指すのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8652k/>

魔王アテネの逆襲～勇者をぶっ倒せ!?～

2011年12月19日00時58分発行